日本語の指示詞に関する研究概観－対照研究を中心に－

単　娜

詳細目次

1. はじめに
2. 問題の所在
2.1. 本稿の位置付け
2.2. 習得研究で示される問題
3. ダイクシスと照応
3.1. 「ダイクシス」と「照応」の定義
3.2. 世界の言語の指示体系
4. 言語学(日本語学)における比較対照研究
4.1. 遠近距離説・なわばり説に基づく議論
4.1.1. 日本語 vs. 2 項指示体系を持つ英語・中国語
4.1.1.1 日本語と英語
4.1.1.2 日本語と中国語
4.1.2. 日本語 vs. 3 項指示体系を持つ韓国語・タイ語
4.1.2.1 日本語と韓国語
4.1.2.2 日本語とタイ語
4.1.3. 多言語の同時的な考察
4.2. 談話理論による考察
4.3. 4 章のまとめ
5. 指示詞の習得研究の知見についての再検討
5.1. 第 1 言語要因－言語転移の可能性の再検討
5.2. 目標言語要因
5.3. 「マルチリンガリズム」という新たなパラダイムからの検討
6. おわりに
稿末注
参照文献

日本語の指示詞に関する研究概観
―対照研究を中心に―

単 娜

要 旨

本稿では、習得が困難とされる日本語の指示詞を取り上げ、日本語と同様の指示体系をなす言語、及び異なる指示体系をなす言語の比較対照研究を中心に概観する。日本語の指示詞は、多言語比較対照という観点ではどこに位置けられるか、またそこにはどのような特徴があるかを示し、ここからの成果を指示詞の習得研究へ応用可能にすることを目的とする。そこで、まず、問題の所在を提示し、本稿の位置付けを示したうえで、指示詞に関わる基本的な概念の定義を示す。次に、言語学(日本語学)における指示詞研究の諸理論に基づいた対照研究を中心に、指示体系別にレビューをする。指示詞の使い分け要因に、普遍的なものと日本語の個別性を持つものがあることを示し、対照研究から得られた知見が習得研究とどう結びつくかを述べる。

【キーワード】ダイクシス、 照応、 指示詞の使い分け要因、 普遍性、 個別性

1. はじめに

指示詞は、原初的な言語機能をもった語彙群であるため、ほとんどの言語に存在している(吉田 1980; Diessel 1999; Dixon 2003)。さらに、言語の指示体系は空間の言語的及び知覚的表現の違いを構成する興味深い項目(Kemmerer 1999)として、古くから多くの研究において議論されてきた。指示詞に関わる研究に興味を示す分野は、いまや言語学、応用言語学、言語心理学、哲学など、伝統的に言語を研究対象としてきた諸学問にとどまらず、民俗学、情報工学、建築学などをも含む広範な学問領域にわたっている。様々な分野において関心が持たれることを背景にして、日本語の指示詞に関する研究も、盛んに行われている。金水・田窪は、20 世紀以来の指示詞に関わる論文を年代順にリストにし、ウェブサイトに掲載している[1]。

指示詞は殆どの言語に存在しているものの、言語によって、指示詞の構造や使い分け規則が異なることが少なくない。日本語教育の立場から見た場合、日本語の指示詞は初級の段階で導入されることが殆どであるが、上級になっても指示詞の誤用が目立つことは早くから指摘されており、学習者にとって習得が難しい文法項目であると言われている。そこで、日本語の指示詞の習得に関する研究では、指示詞の習得に影響を与える要因としては、これまでは年齢(申 1985a)、インプット(迫田 1998; 孫 2005; 森塚 2002)、第一言語(安 1996; 新村 1992; 渡邊 1996)、目標言語能力(安 1996; 新村 1992)などが挙げられてきている。特に学習者の指示詞の使用傾向や誤用に注目し、学習者の第一言語(母語)との関連性を検討する研究が数多く行われている。学習者の母語を踏まえた検討からは、指示詞の習得に、(1)母語知識への依存による負の転移があること(安 1996, 1998; 高 2002a, 2002b; 単 2003a)、(2)母語知識への依存による正の転移があること(安 1996, 1998, 1999)、(3)母語知識に依存しないこと(迫田 1993a, 1996a; 単 2003b)が示されている。ここから、学習者の母語の指示体系を検討することが指示詞の習得研究では極めて重要であることがわかる。

吉田(1980)は、世界の言語の指示詞を類型論的にまとめ、「指示詞のもつ空間の距離的認識というものは、無意識的なものであり、かつあるセットの中から必ずどれかが選ばれるという性質をもっており、一旦学習されるとかなり根強くその人の中に定着し、その言語の指示詞の空間分割の仕方にとらわれてしまう」(吉田 1980: 836)と指摘している。つまり、指示詞の場合は、母語で完成された認識の仕方は、容易に目標言語に転移することが考えられる。

指示詞の習得に見られる学習者の使い分けは、母語知識による転移があるか否かが決定的な影響を与えるため、その検討には対照研究が不可欠の基盤となっている(Odlin 1989)。対照言語学が登場した

のは、1950年代から60年代にかけてであり、当初、対照研究の成果は、外国語学習者が犯しやすい誤用を予測し、外国語教育に大きく寄与すると考えられた。しかし、初期の対照研究は、誤用の原因となる負の言語転移にしか関心がなかった(長友 1995)。対照研究は外国語教育に有用な部分もあったが、その後の研究で、外国語学習者の誤りは必ずしも母語の影響によるものばかりでないことが明らかになり、外国語教育における対照言語学的観点の限界が指摘された(長友 1995; Ellis 1985; Odlin 1989)。

母語が第二言語(外国語)学習にどのように影響するか、どの程度影響するかについては、まだ完全に明らかになったとはいえないが、母語が影響することは、疑いないと思われる(角田 1991)。今日の第二言語習得研究においては、母語による言語転移の問題を検討することが不可欠となり、同時にその重要性が改めて認識され、その結果、問題の所在を明らかにする対照研究は新たな段階にさしかかろうとしている(生越 2002; 長友 1995)。目下、新たな段階の対照研究に対しては、言語の普遍的原理及び言語の多様性を明確にすること、母語による転移の可能性は、負の転移のみならず正の転移についても究明することが課題とされている。

Odlin(1989)も指摘したように、言語教師が転移の問題を重視したうえで、言語間や文化間の相違を考慮に入れて指導を行うことはより効果的であろう。そこで、近年の対照研究は、単に言語間の個別的な異同について論じるのではなく、言語の普遍性と多様性の追求を背景とした研究になりつつある(生越 2002)。比較対照研究で明らかにされる言語間に共通している普遍的原理及び各々の言語に依存する多様性を知ることは、「教える側だけではなく、学習する側にもそれを認め、学習者が母語能力を活用して自ら行う対照分析の意義も唱えられるようになってきている」(長友 1995: 172)。

本稿は、日本語の指示詞について、多言語比較対照という観点からの位置付け・特徴を示し、その成果を日本語教育へ応用することを目的とする。その結果、他言語との比較を通して、日本語の指示詞の使い分け要因の普遍的な要素と個別性をもつ要素がより顕著に示されるようになると思われる。更に、日本語に見られる普遍性と個別性を持つ要素と、従来の習得研究で指摘される学習者の母語による転移がある項目とそうでない項目との関係を示し、転移の要因を探ってみたい。そのため、まず、日本語の指示詞を中心とした対照研究を中心にレビューし、比較対照研究から得られた知見が習得研究とどう結びつくかを述べ、日本語教育への示唆を試みる。

なお、本稿でいう「対照研究」とは、いわゆる言語的な比較対照研究を中心に取り扱うほか、実験的な手法などを通して、日本語母語話者と非母語話者の指示詞(場合によって日本語に限らず、学習者の母語における指示詞)の使用に関する比較研究もレビューの範囲に入れる。より広義の意味での比較対照研究の成果を踏まえることによって、日本語の指示詞の特徴、学習者の指示詞コソアの習得を困難にする要因が浮き彫りになると考えているからである。

2. 問題の所在

2.1 本稿の位置付け

日本語の指示詞研究は、古くから日本語学・国語学の分野において多大な関心が持たれており、近年では、対照言語学、心理学、応用言語学などの分野においても注目されるようになっている。指示詞に関わる論文も多数存在しており、それに関するレビュー論文も数本出されている。今まで発表されている日本語の指示詞に関わる主なレビュー論文[2]は、発表年代順位に並べると以下のようになる。

[1]

(1) 遠藤(1988)「日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究」

(2) 金水・田窪(1992)「解説編　日本語指示詞研究史から／へ」

(3) 菅沼(2000)「最近の指示語研究と日本語からの貢献－指示語使用における普遍性と個別性を求めて－」

(4) 森塚(2003)「日本語指示詞コソアとその習得研究の概観」

遠藤(1988)は、それまでの日本語の指示詞に関する日本語学的・国語学的な研究の観点を踏まえたうえで、日本語指示詞における言語心理学の実証的・発達的研究を概観したものである。その主な示唆として挙げられるのは、(1)話し手・聞き手・指示対象の位置関係や物理的距離が統制された実験的な状況では、話し手が指示詞コソアをどのように使い分けているかが明らかになってきた、(2)日本人の子

どもの母語発達過程における指示詞の発達は、「現前指示→中間的指示→文脈指示」という道筋になっている、(3)照応におけるコソアの使い分けに関する実証的研究が少ない、ということである。それまでの言語心理学的な研究は、遠藤のこの論文によって、各々の研究間の相互関係が明らかになっており、その後の指示詞における言語心理学的研究の方向付けに多大な意義があった。同論文はまた、言語心理学的研究で得られた知見を、外国語における指示詞使用のメカニズムと比較することの必要性を今後の課題として挙げている。

金水・田窪(1992)は、それまでの日本語指示詞研究における代表的な理論や仮説を、研究の流れに沿って解説しながら概観したものである。それまで雑多に存在していた日本語の指示詞研究の知見をわかりやすく再整理し、談話管理理論に基づく日本語のモデルを対象とした日本語指示詞の分析・知見を紹介している。また、「日本語のモデルを確定することは、一方で外国語との相違点を見極めていくことと作業的に並行して行われなければならない」(金水・田窪 1992: 191)とも述べており、ここでも、対照研究の重要性が示唆されている。

菅沼(2000)は、最近の指示詞研究のなか、とりわけ日英対照研究を中心に概観し、研究の流れが静的・自己中心的分析から動的解釈へ変化していると指摘した。その理由の一つとして、菅沼は分析対象データの変化を挙げ、より現実的に指示詞の使用を把握するために、実際の談話を分析対象とする研究が必要だと主張した。この指摘は非常に重要と思われる。実際の談話材料を分析することによって、指示詞の使用における多様性がより多面的に見られる可能性が高く、更には指示詞使用のメカニズムの解明につながる手がかりの発見も期待されよう。同論文はまた、日本語の指示詞に顕著に見られる非指示的[3]側面をも含めた枠組の必要性を主張し、指示詞が果たす談話機能からの検討が重要であることを示唆している。

森塚(2003)は、日本語教育への示唆を目的とし、日本語学及び言語学における指示詞研究、指示詞の習得研究を丁寧かつ緻密にまとめている。指示詞、とりわけ文脈指示に関する言語学的研究が進んでいることを提示したうえ、学習者言語における指示詞の使用を如何に忠実かつ正確に記述し、解釈するのか、という観点を含め、日本語学分野の最近の知見を取り入れる必要があることを指摘した。その知見を生かした新しい習得研究におけるダイクシスと照応を統合した分析の枠組を紹介している。

以上のように、日本語の指示詞に関するレビュー論文は既に何本かあり、それぞれ独自の観点によって先行研究をまとめ、指示詞研究への新たな示唆と今後の展望が示されている。遠藤(1988)、金水・田窪(1992)も指摘するように、言語心理学分野及び日本語学分野の双方において、日本語の指示詞の使い分けに影響を与える要因を明らかにするためには、他言語との比較対照研究が欠かせない。また、第二言語習得の分野においても、学習者の母語の役割が再認識されつつあり、比較対照研究の新たなあり方も考えられてきている。しかし、今までのレビュー論文のなかで、日本語の指示詞を他の複数の言語の指示詞との比較対照研究をレビューしているものは、管見の限りではまだない。

2.2 習得研究で示される問題

日本語の指示詞は、初級段階から導入されるにも関わらず、上級段階の学習者の使用にも誤用が目立つ(酒井 1987; 迫田 1993a)。また、母語を問わず、日本語の指示詞の習得は、学習者にとって困難であることが指摘されている(迫田 1993a)。そこで、日本語の指示詞習得研究では、学習者言語に注目し、様々な観点から分析した研究はこれまで多くなされている。それを表1にまとめておく。これらの研究によって、学習者の習得実態が明らかになってきている。

表1で示されたように、日本語の指示詞の習得上の問題点については、様々な指摘がなされているが、その中で最も多く指摘されているのは、母語転移である。それはまた母語による正の転移と負の転移の両方が確認されている。母語による正の転移が示される項目のうち、多くの言語に共通して見られたのは現場指示のコ系(特に融合型)使用である。また、日本語のソ系に対応することが多い韓国語のku系による正の転移も提示されている。一方、負の転移が示唆される項目は、例えば話し手と聞き手の共有知識を示すア系をソ系にする用法がある。しかし、この負の転移と言われる用法は、実は母語が異なる学習者の間に確認された。また、中間言語の形成を調べた研究では、ソ系とア系の使い分けの難しさが指摘されており、その難しいとされる原因はア系にある、という指摘もある(迫田 1993b)。このような、

母語による負の転移と考えられる誤用が、学習者の母語によるものか否かという問いに答えるには、指示詞の使い分け要因を視野に入れた検討が必要であろう。また、習得研究で指摘された誤用現象のうち、学習者の母語を問わず、ソ系をア系にする誤用現象が普遍的に見られたことでは、学習者の母語に全く関連性がないのかを、多くの言語との比較を踏まえたうえで再度確かめる必要があると思われる。

本稿は、日本語の指示詞の対照研究を中心に、指示詞における使い分けに影響を与える要因は言語によって同じものと異なるものがあることを明らかにし、それぞれの要因が言語的に普遍的に見られる要因であるか、それとも日本語の特有なものなのかを、多言語比較対照の知見を踏まえたうえで論じる。また、日本語の指示詞に関する習得研究の成果に照らし合わせて、より普遍的な視点からの解釈を試みる。

表1　日本語の指示詞に関する習得研究

研究者 (発表年)	対象者の 母語・人数	主な結果・仮説	習得に影響する 要因・問題点
申 (1985a)	韓国語 92	母語知識の影響 ソとアの使い分けの誤用率が高い ⇒日韓の指示詞のずれが原因	年齢、滞日期間 母語転移 (負の転移)
酒井 (1987)	中国語 32 韓国語 24 その他 43	学習者の独自の「通則」仮説 現場指示の場合 話し手の所有物、よく知っている人・こと・場所　→コ 話し手の所有物でないもの、直接関係のない人・こと・場所　→ア 文脈指示の場合 聞き手が知らないことのソ系→ア 共通知識のア系→ソ 母語による負の転移 現場にいない人を指し示すア系誤用：ア→コ (中・韓の学習者)	中間言語 (学習者ルール) 母語転移 (負の転移)
新村 (1992)	ENS 10 ENS 日本語学習者 41 (上 18, 中 23) JNS 32 JNS 英語学習者 23 (上 5, 中 18)	習得順序(両言語に共通) 現場指示＞非現場指示 言語能力が習得に影響を与える。 中級段階に回避傾向あり。 母語による転移 ・日本人英語学習者は指示詞を多用。 ・that のかわりに it、the＋NP を使用。 ・英語が母語の日本語学習者はソとアの混同が多い。ソ→ア誤用が多い。 文脈指示の指導に共有知識の概念が有効。	母語転移 言語能力
迫田 (1993a)	英語＋中国語 10 韓国語＋タガログ語 10 その他 30 JNS　10	習得が困難な点：ソとアの使い分け 問題点がアにある。 ⇒共有知識や体験を指す用法が増加していない。聞き手との情報量の差を考慮することが学習者に難しい。 母語による正の転移： 母語体系が日本語に近い学習者の使用 ⇒日本語母語話者の使用傾向に近い	中間言語 (誤用の普遍性) 母語転移 (正の転移)
Niimura & Hayashi (1994)	英語 102 (中 43, 上 59) JNS　76	習得順序：現場指示＞非現場指示 習得困難の原因 ・日英の使い分けの違い 指示対象が話し手の直接経験的領域にあるかどうかという規定が英語と違う ・母語による転移：this がコとの対応	目標言語 母語転移

ワーサナー (1995)	タイ語 150 (初 50, 中 50, 上 50) JNS 50	母語による正の転移 ・非現場指示： コ→コ(対応関係が一致) 母語による負の転移 ・観念指示：ア→ソ(NAN に対応) 中間言語：学習者ルール ・観念指示と照応指示のソ系誤用 ソ→ア: 母語規則に反する。訓練上の転移。 ・母語体系を日本語に過剰に対応する 習得困難点 ・ソとアの使い分け、特にソが困難	母語転移 (正の転移) (負の転移) 中間言語 (学習者ルール)
安 (1996)	韓国語 138 (初 40, 中 43, 上 55)	韓国語による負の転移 現象：ア→ソ誤用(韓で ku のみ対応) ・独立的話題指示(話し手の記憶にのみ存在)のア系 ・相対的話題指示(共通知識)のア系 韓国語の正の転移(対応関係が一致) ・相対的話題指示：ソ→ソ ・照応用法：コ→コ、ソ→ソ	母語転移 (負の転移) (正の転移) 言語能力
迫田 (1996a)	韓国語 3 中国語 3	正用の出現順序： 文脈コ＞文脈ソ＞文脈ア＞観念 ソ→ア誤用の消滅時期： 母語による影響とは限らない コ系誤用の消滅時期： 母語による違い：　韓＞中	中間言語 (誤用の普遍性)
渡邊 (1996)	JNS 5 韓国語 5 中国語 5 ドイツ語 5	照応用法(母語話者が殆どソ系を使用) ア系誤用数：中＞韓＞独 母語による負の転移：ソ→ア 中：na をアに対応する 母語による正の転移 韓：ku→ソへの対応 独：定冠詞 der→ソへの対応 目標言語規則の誤解によるア系誤用 韓：母語と異なるア系を使用 中：zhe; na をアにする 母語の影響は初級より中上級が強い	母語転移 (正の転移) (負の転移) 中間言語 (学習者ルール)
迫田 (1997a)	中国語 20 韓国語 20 英語 20 JNS 20	母語による負の転移 ・相手が談話に導入した指示対象 ソ→コ誤用：　中＞英・韓 ⇒中国語による影響の可能性が高い。	母語転移 (負の転移)
迫田 (1997b)	中国語 20 韓国語 20 JNS 20	学習者の選択パターン ソ＋抽象名詞 ア＋具体名詞	中間言語 (学習者ルール)
上垣 (1997)	JSL 50 (中国語 15,英語 10, 韓国語 12, 他 13) JNS 25	母語による影響が顕著でない 文脈指示ソ→ア誤用 習得困難な用法 前方照応のソ、体験提示のソ 後方照応のコ、観念指示のア	中間言語 (誤用の普遍性) 言語能力
安 (1998)	韓国語 251 (初 69, 中 76, 上 106) JNS 72	韓国語による負の転移 ・相対的話題指示(共通知識)：ア→ソ ・独立的話題指示：ア→ソ 原因：韓国語では ku 系で対応するため (初級ほど強い) 韓国語の正の転移(日韓の対応関係が一致) 相対的話題指示：ソ→ソ。 (複数選択可能でもソにする傾向。) 照応用法：コ→コ、ソ→ソ	母語転移 (負の転移) (正の転移)

安 (1999)	韓国語 408 (初 183, 中 136, 上 89) 中国語 316 (初 61, 中 116, 上 139)	学習者に共通的な結果 相対的対立型現場指示： ・聞き手領域を指すソ系が習得困難 ・使い分けの習得されやすい順序： コとア　＞　ソとア 母語の正の転移(対応関係が一致) 相対的対立型現場指示コ系	母語転移 (正の転移) 中間言語 (共通習得順序)
袴田 (1999)	インドネシア語 3[4]	習得順序 全体：現場指示＞非現場指示 現場・非現場指示とも：コ＞ソ≧ア 現場指示のコ系：融合型＞対立型 明示的指導の有効性 有効性無：コ、有効性有：現場指示のソとア 学習ストラテジー 使用回避(対話者が手に持っている対象物のソ系) インプット：日本語話者はコ系を多用し、ソとアの使用が少ない	学習ストラテジー インプット
安 (2000)	安 (1999) に同じ	中国語による負の転移 独立的現場指示アの正用率が低い 韓国語・中国語による正の転移 独立的／相対的融合現場指示コ系 母語構造に関係ない中間言語現象 相対的融合型現場指示ア系： ア→ソ傾向が中韓学習者に見られる	母語転移 (負の転移) (正の転移) 中間言語 (学習者ルール)
安 (2001)	韓国語 411 (初 179, 中 138, 上 94) 中国語 328 (初 64;中 120, 上 144)	(コソア全てが使える言語環境) 母語による転移 現場指示ソ系使用率：韓＞中 ア系使用率：中＞韓 非現場指示コ系使用率：中＞韓 初級段階が最も強く影響を受ける 言語能力による使用傾向の差異： 韓：あり　中：なし	母語転移 (負の転移) (正の転移) 言語能力
安 (2002)	安 (2001) に同じ	母語による転移 ソア両方が使える非現場指示言語環境： ソを選択する割合：韓＞中 言語能力による使用傾向の差異： 韓：あり　中：なし 目標言語要因： ソとアの使い分けに日本語規則も影響	母語転移 (負の転移) (正の転移) 言語能力 目標言語
高 (2002a)	中国語 100	母語による負の転移 指示対象への物理的距離感覚の日中の違い ⇒聞き手のソ(対立型)の使用が積極的でない 後方照応の指示詞の使用範囲：コ＞zhe ⇒後方照応コ系の誤用が見られる 非共有知識ソ系、共有知識ア系指示 ⇒短絡に na に対応させる 慣用的指示用法の日中不対応による誤用	母語転移 (負の転移)
高 (2002b)	中国語 100 (中 25, 中上 25, 上 25, 超上 25)	母語による転移 現場指示対立型誤用：ソ→ア(負の転移) 文脈指示誤用：ソ→ア(負の転移) 共有知識ア系指示： 母語使用に不一致：ア→ソ(負の転移) 母語使用に一致：ア→ア(正の転移) 社会的習慣的差異による負の転移 慣用表現の誤用	母語転移 (負の転移) (正の転移)

森塚 (2001)	ロシア語 1 マラティ語 1 レルグ語 1 JNS 5	語形式によって異なった習得過程を示す 共通して見られる特徴： 　融合型のコ系が習得されている 　照応のソ系の使用が少ない 学習者ストラテジー 　物理的な情報への依存 　日記に登場した人物をカレで指示する	学習ストラテジー 中間言語 　(多様性・個別性)
中河 (2002)	ベトナム語 1 インドネシア語 1	誤用の消滅(迫田 1998 韓国人学習者との比較) 　ソ→ア：消滅しない(韓国人学習者に同じ) 　ソ→コ：消滅しない(韓国人学習者に異なる) 教室内指導の有効性の仮説 　自己発話照応の談話内・発話内のソ系 母語による影響ではない：ソ→ア誤用 学習者ルール 　話題が共有知識か一方知識かで判断	中間言語 　(学習者ルール) インプット 　(教室内指導)
森塚 (2002)	ロシア語 1	母語による転移の可能性 　コレハの使用←主題化されやすいロシア語の 　э т оによる転移 母語話者インプットの頻度による影響 学習者ルールの仮説 　指示対象のダイクシス性の強弱で使い分ける	母語転移 インプット 中間言語 　(学習者ルール)
単 (2003a)	中国語 104 　(上位群 48, 　下位群 56) JNS 63	習得プロセスの仮説： 　ダイクシス(直接コンテスト)＞照応≧ダイクシス（間接コンテスト） 習得が困難な点：ソとアの使い分け ソ→コ誤用は言語能力に応じて消滅 学習者の独自の使い分けルール 　母語知識に依存している項目 　・共有知識を指すア系 　　zhe 系に対応する文：ア→コ 　　na 系に対応する文：ア→ア 　母語知識に依存していない項目 　・純粋な照応用法のソ系 　　先行詞条件が「コト」ソ→ソ 　　先行詞条件が「モノ」：ソ→ア	言語能力 目標言語学習歴 母語転移 中間言語 　(学習者ルール) 学習ストラテジー
金 (2004)	韓国語 3	共通の使用頻度：ソ＞ア＞コ ソ系の多用に母語転移の可能性あり 定形表現が多く、使用傾向が見られる 一時的な出会いの人に･･･ソ 身近な人物に･･･ア←心的距離	母語転移
孫 (2005)	台湾人学習者 JFL98 　(上位群 49, 　下位群 49) JSL63 　(上位群 37, 　下位群 26)	現場指示の融合型のソ、アの正答率：JSL＞JFL 誤用パターン「ソ→ア」の出現率： 　JSL 上位群＞JFL 上位群 現場指示対立型・独立的話題指示コ系の正答率 　JSL 下位群＜JFL 下位群	インプット 言語能力

注：「対象者」欄、ENS =English native speaker、JNS=Japanese native speaker.

3. ダイクシスと照応

これまで、日本語と他言語の指示詞における対照研究では、現場指示と文脈指示という指示対象の依存する条件による分け方が広く用いられている。ただし、研究者によって、「現場指示＝ダイクシス的用法、文脈指示＝照応的用法」(例えば國廣 1981; 讃井 1988)という考え方や、「現場指示＝ダイクシス用法、観念指示＝話し手の記憶・経験に用いられる指示、文脈指示＝言語的文脈に依存する指示」(例えば木村 1992; 申 1985b)という考え方、「話題指示＝話題性のある素材が指示対象である指示、単純照応指示＝言語的文脈に依存する指示」と

いう考え方(例えば宋 1991)など、現場指示と文脈指示の定義はさまざまである。そのため、先行研究をレビューするためには、より大きな枠組みで指示詞の用法を捉える必要がある。

また、学習者の言語習得の過程は、動的で連続性を持つプロセスといわれる。仮に、一つの言語項目の習得に注目するにしても、なるべく統合的に、全体像を見極める必要がある。実際、第一言語の発達における指示詞の研究でも、日本語の指示詞は、ダイクシスから照応へという動的なプロセスで発達していくことが示唆されている（斉藤・久慈 1985）ことから、本稿では、指示詞をより大きな枠組みで捉えなおし、ダイクシスと照応という概念を用いて先行研究をレビューする。

3.1 「ダイクシス」と「照応」の定義

ダイクシス(Deixis)という言葉はギリシャ語の“deiktikos”に由来し、直接指すことという意味を持っている言葉である。日本語では「直示」とも訳されることがある。ダイクシスとは、「発話という行動の空間－時間的座標に発話を定位するという、人称代名詞、指示代名詞、テンス、その他の言語形式の持つ機能」(Lyons 1977: 636、日本語訳は田中 1981: 17による)のことであり、発話の場にいなければ十分な理解ができない性質をもつ(田中 1981)。つまり、話し手や時間、空間、または発言現場によって言及するものが変わるという性質を持っている言葉はダイクシスな特性を持っていることがわかる。

たとえば、話し手が聞き手の持っている本を指して、「それ読んだ。おもしろかったよ。」といった場合、この発話は、発話者、発話の場、発話の時がわかってはじめて正しく解釈される(Levinson 1983)。指示詞それ自体が指すものを持つのではなく、現場や文脈の中にあるものを指す事によってそれ自体の指す対象が決まるという性格を持っている。研究によって、ダイクシスを広義的な意味合い(例えば Lyons 1977)でとらえる場合もあれば、狭義的な意味合いで指示詞の機能のひとつとしてとらえる(例えば Dixon 2003)場合もある。ダイクシスの性質を持つ代表的な例としては、指示詞や第一人称、第二人称代名詞、時制、now や here のような特定の時間、および場所の副詞、などが挙げられる(Levinson 1983)。つまり、指示詞はもっとも典型的なダイクシス語のひとつである(田中 1981)。

Levinson(1983)によれば、伝統的な範疇のダイクシスは、「人称(第一人称、第二人称、第三人称)」、「場所(近・非近)」、「時制(過去・現在・未来)」の三つである。人称を除けば、指示詞に特にかかわるのは、「場所」「時制」である。日本語の指示体系においては、ダイクシス用法には、コ系、ソ系、ア系の3つのすべてが現れる(田中 1981)。

一方、照応とは、「発話(テキスト指示的表現を含む)が位置する、展開中の談話の一部分への言及の記号化に関係がある」[5](Levinson 1983: 62)ものである。即ち、照応用法には、すでに談話の場に言及できる何かがあるのを前提とし(Lyons 1977)、「一般に文の中の、あるいは一貫性のある文連続の中の二つの言語形式が同一の対象を指示している場合のその二つの言語形式の関係を意味する」(田中 1981: 25)。照応関係を構成する言語形式にはいろいろなものがあるが、その代表的なものとして指示詞が挙げられる。例えば、「この道をまっすぐ行くと郵便局があって、そのとなりに交番がありますから、そこできいてください。」(田中 1981: 26)という発話の場合、「そのとなり」は「郵便局」と照応関係をなしており、「郵便局」は指示詞「その」の先行詞となる。

先行詞と照応詞との間の位置関係によって、照応は「前方照応」と「後方照応」に分けられる。日本語の指示体系においては、照応用法には、コ系とソ系が現れるが、ア系が現れない(田中 1981)。ア系にはダイクシス用法しかないということは、三上(1970)、田中(1981)、金水(1999)などにも指摘されている。その理由は、ア系で指し示すいわゆる非現場指示用法は、その指示対象は主に話し手の記憶に依存するものである。例えば次の[2]に見られるような例は、一見照応用法のように見えるが、先行文脈によって話し手が聞き手との共有記憶が喚起され、指示対象が眼前にいるように、それを指し示す。従って、ダイクシス性を持つと言える。

[2]
きのう、山田さんに会いました。あの人、変わった人ですね。 (金水 1999: 72)

本稿においては、特別な説明がない限り、**ダイクシス**(例えば場所[近・非近]、時制[過去・現在・未来]など)と**照応**（前方照応と後方照応など）に分けて検討する[6]。なお、例えば場所のダイクシスの場合、言語によって、「近・非近」に更に細かい要素

が入ることがある。その場合、言語に応じて下位分類をする。

3.2 世界の言語の指示体系

吉田(1980)は、世界の479の言語の指示詞体系を分類し、12の指示類型を得た。それによると、世界中に最も広く認められる類型は2分型、即ち遠近によって区別される2つの指示詞[7]からなるものである。2分型の次に多い類型は、3つの指示詞からなる3分型[8]である。指示詞が使われている数で指示体系を説明すると、2 項指示体系、3 項指示体系、などという表現ができる。

表2　世界の言語の指示体系

(吉田 1980より筆者作成)

指示体系	類型的分布順位	言語例
2項	第1位 (47.4%)	英語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、ブルガリア語、ハンガリー語、オランダ語、インドネシア語[9]、など
3項	第2位 (35.1%)	日本語、韓国語、タイ語、トルコ語、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、イタリア語、ギリシャ語、アラビア語、など

1項指示体系を除くと、指示詞が少ないほど、「より一般的な類型となることをしめしている」(吉田 1980: 914)。つまり、2項指示体系は、「世界中にもっとも広くみとめられる類型であり、人間のつくり出した、もっとも基本的な類型のひとつと考えられ」(吉田 1980: 854; Diessel 1999; Dixon 2003)、指示体系に2種類の基本タイプ—近と非近、をもつ言語が一般的である(Kemmerer 1999)。

4. 言語学(日本語学)における比較対照研究

指示詞コソアに関する研究は、国語学の分野において、吉田(1980)によれば、18世紀から既に富士谷成章などによって行われていた。コソアの指示領域や使い分けの規則についての捉え方は研究者によって異なっているが、過去の研究を「大きく分けると2つあり、「(a)コソアを話し手から対象までの距離によって性格付けるとらえかたと、(b)話し手ときき手のなわばり関係によって性格付けるとらえかた」」(高橋・鈴木 1982: 2)がある。

(a)の捉え方に基づく指示詞の研究は、「近称・中称・遠称」という用語を用い、話し手から対象までの距離による捉え方をとっている。(b)の捉え方は、佐久間(1936, 増補版 1951)に代表される捉え方、即ち話し手、聞き手のなわばり関係による捉え方であり、この「なわばり」という捉え方が現れた後、指示詞コソアド研究は大きく進展した(高橋・鈴木 1982; 金水・田窪 1992)。その後の研究の流れには、従来の「近称・中称・遠称」説と佐久間説(自称・対称・他称)とを何らかの形で両立あるいは混在させるという特徴がある(高橋・鈴木 1982)。つまり、日本語の指示詞の研究においては、遠近理論に基づく検討(阪田 1971 など)から、「聞き手」という概念の明示的な導入を通して、日本語の特徴を取り入れた「なわばり」理論に基づく検討(久野 1973; 三上 1955 など)へと転換し、両理論を統合した見方による議論(正保 1981 など)がその後の研究では主流となっている。日本語の指示詞の対照研究もこうした流れに応じて行われている。また、金水・田窪(1990)以来、談話管理理論[10]に基づいた日本語の指示詞への検討が行われ、日本語で構築された仮説の一般化を目指すために、他言語の指示詞との対照研究も多く行われている。

なお、指示詞の使い分け要因の一つ、聞き手との「共有知識」については、談話管理理論に基づいた金水などの検討は、この考え方に異を唱えている。そもそも、「共有知識」についての議論は、久野(1973)がソ系とア系の使い分け原則を提示してから活発になってきている。久野は、文脈指示のソ系とア系の区別について、次のように述べている。

[3]

ア－系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ－系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

(久野 1973: 185)

久野のこの論説は、「話し手と聞き手の間の知識の共有状態を用いて言語事実を説明」(金水・田窪

1992)していることから、「共有知識仮説」と金水・田窪(1992)に名付けられている。しかし、久野説では説明できない例として、黒田(1979)が次の反例[4]を挙げている。話し手だけが火事のことを知っていて、聞き手が知らない場合でも、ア系が用いられる例である。黒田は聞き手要素を消去し、アとソの使い分けを「直接的知識」と「概念的知識」によって解釈をしている。話し手が火事のことをよく知っているので、話し手の直接的知識となり、それに基づいて「人が何人も死んだ」という推定をし、ア系指示を用いる。一方、聞き手は話し手の話で火事のことについて概念的理解を付け加え、逆の推論（人が何人も死んだだろうと推定されるような大火事）でしか理解できないという。

[4]
今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。
(黒田 1979／1992: 101　ページは金水・田窪(編)『指示詞』による)

金水・田窪(1992)、田窪・金水(1996)、Takubo & Kinsui(1997)、金水(1999)は、黒田の示唆を引き継いだ形で発展させた。彼らはメンタル・スペース理論を基にした談話管理理論を提案し、「直接経験的知識」(D-領域)と「間接経験的知識」(I-領域)[11]を設定している。その詳細は 4.2 で述べるが、このモデルによる例[4]への解釈は、話し手だけが火事のことを経験したので、D-領域にアクセスし、ア系が用いられる、ということである。一方、I-領域に帰属する情報はソ系で指し示すと提示している。このモデルによる解釈の妥当性を主張するとともに、金水等は、共有知識仮説で明確でなかった話し手自身の知識と他者の知識の間には本質的な差異があること、仮説による現場指示と文脈指示の統一的な扱いが難しいことなどから、「完全な共有知識（相互知識）は望めない」(田窪・金水 1996: 61)、「表面的な議論でしかなく、本質は更に深いところにある」(金水・田窪 1992: 177)と共有知識仮説に異を唱えている。金水の共有知識への反論に対し、東郷(2000)は共有知識という概念の必要性を主張し、「ア系指示詞は、共有知識領域に存在する対象をさす。共有知識領域に存在する対象をさすことができるのは、ア系に限られる」(東郷 2000: 30)との仮説を提示している。その根拠としては、共有知識を想定しなければ、たとえば例[5]のア系用法を説明できないことが挙げられている。

[5]
[会社の廊下で部長が部下に向かっていきなり]
A: 君、あの件、どうなった?
B: はい、あの件でしたら、うまく行きました。
(東郷 2000: 40)

「ア系が使えるためには、指示対象が話し手のD-領域にあるだけでなく、聞き手の D-領域にもあり、話し手がそのことを知っている（つまり共有知識がある）という前提が必要」(東郷 2000: 38)と東郷は主張している。その根拠は、話し手の共有知識領域と聞き手の共有知識領域の一部がリンクされることによって、アの指示対象の同一性が保証される、ということである。このリンクは、「共通体験によって保証されることもあれば、指示対象について互いに確認しあう言語行為によって確立されることもある」(東郷 2000: 39)。

このように、共有知識という考え方に関しては、支持する側と反対する側の議論が続いている。しかし、上記で見てきたように、金水・田窪(1992)などの研究で提示されている「直接経験領域」「間接経験領域」という考え方と、共有知識という考え方とは、根底から矛盾しているものではないと思われる。金水・田窪(1992)も両者の共通点(「言語と世界をつなぐ中間構造としての知識モデルを仮定している点」(金水・田窪 1992: 183))があることを認めている。また、「間接経験領域」に「聞き手の知識・知覚」が包含される点では、事実上、聞き手領域の存在が認められることになると思われる。無論、話し手と聞き手が何を共有知識として持っているのか、話し手が情報をどのようなものとして聞き手に提示しようとするかは、実証的に探求していく必要があり(遠藤 1988)、今後の研究の進展が大いに期待される。

共有知識という考え方は、対照研究をはじめ、習得研究など多くの研究に採用されており(日本語の母語発達研究では斉藤・久慈 1985; 見澤 1986、日本語の第二言語習得研究では安 1996, 1998; 酒井 1987; 迫田 1993a; 宋 1999; 新村 1992; 袴田 1999; 森塚 2002、対照研究では上村 1996; 新村 1992 な

ど)、そして日本語教育で学習者への説明に有効性を持つと認められた(例えば新村 1992)ことから、本稿ではこの考え方を取り入れることにする。

また、日本語の指示詞研究においては、ソ系が「聞き手の領域」に属すという考え方についても、様々な議論がなされている。聞き手領域がソ系をもたらすという考え方は、早くは佐久間(1936)によって確立され、佐久間以降の研究では、「まず「そ＝聞き手」という前提が与えられる」(金水・田窪 1992: 162)研究が多く、「佐久間以降の研究史は、(中略)「聞き手」から自由になるための戦いの歴史であった」(金水・田窪 1992: 162)。

日本語の指示詞の研究においては、聞き手領域内をソ系で指し示すという考え方には、支持する考え方(佐久間 1936; 三上 1955 など)と疑問視する考え方(金水・田窪 1992; 黒田 1979; 堀口 1978 など)、部分的に支持する考え方(正保 1981 など)がある。

疑問視する考え方は、聞き手要因を無視もしくは消去することで指示詞コソアの使い分けの解釈を試みている。堀口(1978)は、ソを話し手領域の「外にある疎遠的な対象を指示する」(堀口 1978: 141)としている。黒田(1979)は、現場と非現場指示のより統一的な解釈を求め、ソは独り言の場面では概念的知識領域に属し、対話の場面では、他者の直接的知識領域に属するとしている。金水・田窪(1992)は、ソは話し手の間接経験的知識領域に属するとしている。しかし、とりわけダイクシス用法の現場指示の場合、日本語の指示詞の使用に聞き手領域が存在すること、そしてそれが「ソ」の使用をもたらすことが多いことは実証されている(コンジット 2004; 高橋・鈴木 1982; 西出・高橋・渡辺 1988; Higashiyama & Ono 1988)。また、前述したとおり、金水等が主張するソ系指示の「間接経験領域」に「聞き手の知識・知覚」が包含される点では、ソ系使用の聞き手領域の存在が認められることが考えられる。従って、本稿はソ系が聞き手領域を指し示すという考え方については、現場指示の対立型で認められる一方、融合型では支持されないという正保(1981)などの考え方を取り入れることにする。

上記で述べた立場に基づき、本稿は指示詞における「遠近距離説」「なわばり説」による議論と、金水などの「談話管理理論」による考察とに分けて、日本語と他言語の対照研究を概観していく。なお、日本語の指示詞の習得研究では、母語が英語、中国語、韓国語、タイ語の学習者を対象者とした研究が多数であるため、この 4 種類の言語を中心に日本語との比較対照研究をレビューする。

4.1 遠近距離説・なわばり説に基づく議論

Lyons(1977)は、指示詞の使い分けに、指示対象が話し手に近いかどうかで、近(proximal)と非近(non-proximal)といった距離概念を用いて説明をしている。のちに、この説明はとりわけ 2 項指示体系に属する言語の指示詞研究において広く取り入られ、さらに、物理的な距離から心理的距離にまで広げて解釈されている。日本語との対照研究は、2 項指示体系は近・非近による解釈をする研究が多くなされてきたが、日本語指示詞におけるなわばり説という理論的展開によって、2 項指示体系も 3 項指示体系も、遠近距離説となわばり説を統合した見方の研究が多くなされるようになってきている。

4.1.1 日本語 vs.2 項指示体系を持つ英語・中国語

西原(1990)によると、同じ内容の日本文と英文を比較した場合、日本語のほうに指示詞の使用が多く見られる。また、王(1985, 1994)では、同じ内容の日本文と中国語文を比較した場合、日本語のほうに指示詞の使用が多く見られると述べられている。結束性という観点から日本語の指示詞が果たす役割は大きい(庵 1995; 森田 1982)ことが、日本語の指示詞の使用が多い理由の一つであろう。一方、許(1989)では、同様の内容で英語と中国語を比較したところ、指示詞の使用は中国語が英語より多いことが示されている。つまり、単純に使用量から見た場合、日・英・中の指示詞の使用は、「日本語＞中国語＞英語」という順番になる。日本語の指示詞の機能は、中国語、英語では指示詞以外のものによって果たされることが多いということになる。

また、Yoshimoto(1986)は、日英指示詞の使い分けの違いについて、時制を用いた説明をしている。中国語と英語の対照研究(許 1989; 余 1997)の知見、及び日中対照研究(王 2004; 余 1997)の示唆を加えて 3 言語の使い分けを図式化すると、図 1 のようになる。

3 言語とも「過去」は遠称系の指示詞、「現在」や「現在」に近いことは近称系指示詞によって表わされることが分かる。それに対し、「未来」時制に関しては、3 言語にそれぞれ異なった指示詞の使用が見られ、「未来」時制が日・英・中 3 言語の指示詞の使い分けを区別する一つの要因になる。

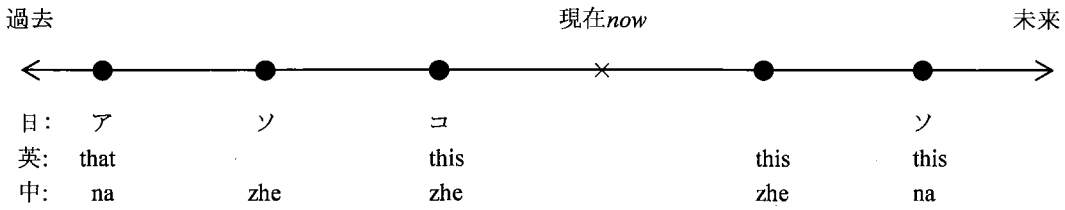

図 1　日本語・英語・中国語の時制による指示詞の使い分け

日本語、英語、中国語の 3 言語を同時に取り扱った比較研究もある。「照応」用法に焦点を当て、日本語、英語、および中国語の母語話者を対象とした実証的な研究には、Miura & Christensen(1991)があり、注目に値する。この研究では、どのタイプの照応[12]がよく用いられるかというリサーチクエスチョンを立て、(1)先行詞位置(文頭／文中／文尾)、(2)言語的つながり(焦点の同様・変化／異なる主題)、(3)時間的距離(近／遠／極遠)、(4)心理的要因(肯定／否定／中立)」という 4 つの要素を取り入れて、言語別に多肢選択テストを実施した。その結果、英語では“it”と“the＋NP”、日本語では「ソレ」と「ソノ＋NP」[13]、中国語では“ta”(3 人称代名詞)が最も多く使われることが分かった。なお、中国語では、“zhe＋NP”と“na＋NP”の多用も観察された。つまり、(1)日本語においては、一貫して照応にソ系を用いること、(2)英語や中国語においては、指示詞の使用より、定冠詞か三人称代名詞によって照応関係を示すことが多いことが示唆されている。この結果は、「三人称代名詞がさほど発達していない日本語のような言語においては、指示詞が三人称代名詞的な用法を補う機能を持つ」(Dixon 2003: 67; 田窪 1990a)こと、「中国語では、英語の it や the のような中立性を持つものがあまり一般的ではない」(Zhang 1991: 18)という指摘、そして上野(1984)、千葉・杉村(1987)、新村(1992)、川鶴(1999)などの「照応用法において日本語では指示詞を使用するのに対し、英語では指示詞を用いないことが多い」という示唆を支持した結果となる。つまり、照応用法において、日・英・中の 3 言語に使用傾向の違いが見られ、英語、中国語は、日本語のソ系指示を多用する傾向と全く異なった傾向を示している。

4.1.1.1 日本語と英語

英語は、日本語と異なり、this(these)と that(those)のように、2 項指示詞によって指示体系をなしている。英語は全体的に that のほうが this より一般的に使われており、無標である(Lyons 1977; Dixon 2003)。また、前方照応には this/that のいずれも用いられるが、後方照応に用いられるのは this のみである(Lyons 1977)。前方照応の this/that は殆ど差異なく用いられるが、this のほうが有標であるのに対し、that は無標であり(Lyons 1977)、「新しい情報の導入には this を用いることが多く」(Dixon 2003: 80)、「相手の持ち出した話題には that を用いる」(新村 1992: 39)ことが明らかにされている。

従来の遠近説による英語の指示詞の使い分け規則に、服部(1968)はなわばり説を導入して使い分け要因を説明している。それはダイクシスと照応の両方をまとめた形で「this：話し手の手が届くところにあるもの、あるいは手が届くかのごとく感じているもの、あるいは話し手の勢力範囲にあるもの、that：そういう範囲の外にあるもの」(服部 1968: 74-75)と説明している。更に、this と that の使い分けに、話し手の示す「親近感」、「興味」、「客観的な態度」、「冷淡な態度」などが密接に関わっていることを指摘している。英語の指示詞の使い分けに話し手要因が重要であることが示唆されている。日・英の指示詞の対応関係については、服部はまた、コレに this を、ソレとアレに that を当てるという見方が一般的であることを提示している。

「コ＝this、ソ・ア＝that」という見方に反例を示す研究がある。千葉・村杉(1987)は、手に持った物あるいは手で触っている物を指す時に英語では that を用いる現象に注目し、指示詞の用法に関する日英の違いを指摘している。それは例えば次のような例である。

[6]

(100 万ドルの値打ちのある Saracen horse(宝石をちりばめた彫刻の馬)をごみの中から見

つけて、それを手にした警官が)
"Well; look at that!"
(ああ、すげえなあ、こりゃあ！)
(千葉・村杉 1987: 116)

手に持っているものや手で触れているということが日本語では近称のコ系指示詞が使用されることが重要であるのに対し、英語では、それが日本語ほど重要な働きをしないと千葉・村杉(1987)は指摘し、日英の指示詞の使い分けに「接触」という要因のもつ重要性による違いが見られると結論付けている。接触による日英のダイクシス性指示詞使用の違いは、今井(2003)の実験的研究でも証明されている。ここで「なわばり」という概念を導入すれば、日本語の場合は、接触によって話し手のなわばり意識が生じ、話し手の領域に認められるゆえに、コ系以外の指示詞が使えなくなることになる。つまり、なわばりという自己の領域の形成が日本語の指示詞の使い分けに優先される要因であることが言える。しかし、このなわばり認識は、英語の指示詞の使用には重要視されない(新村 2005)。なお、ここでは、this という主観的色彩が強い指示詞ではなく、that を用いることは、聞き手に対する何らかの気遣いが見られ(千葉・村杉 1987)、英語の指示詞の使用は、聞き手要因に敏感であることが示唆されている。

照応関係に注目し、日英対照を行った研究は上野(1984)が挙げられる。上野(1984)は、「その」が that (those) に必ずしも対応するものでないことを指摘し、「この＋名詞」に対応する英語の照応詞には、"this～" あるいは代名詞 "he" 等を用いることを示している。これも「コ＝this、ソ・ア＝that」という見方を完全に支持できない結果となっている。また、同一の指示詞を何度も繰り返すのは、日本語では自然な用法であるが、英語では普通許されない(千葉・村杉 1987)。それは例えば次のような例である。

[7]
それが私を咬んだので、私はそれを蹴った。
That bit me so I kicked *that/it.
(千葉・村杉 1987: 122 より筆者が加筆した)

「同一の指示詞の繰り返し」は、単純照応用法であり、日本語では指示詞のソ系が用いられることが普通であるのに対し、英語では、指示詞の形をとらずに、三人称代名詞を用いることになる。新村(1992)は、上野(1984)、千葉・村杉(1987)と同様な指摘をしているが、両言語の違いの理由について、話し手と指示対象の間の「心理的親疎」関係という概念を加えて説明している。それによると、「英語の照応表現には、心理的距離の情報を含み強い指示機能を持つ this･that の他に、(中略)人称代名詞や the ＋Noun Phrase 等単なる照応機能のみで、指示機能を持たない、つまり、心理的親疎等を含まないニュートラルな表現が使われるが、日本語ではその殆どすべての場合にコ・ソ・アの指示表現を用いる」(新村 1992: 43 より一部抄録)という。

この「心理的親疎」と似た「心理的距離」という概念を用いた日英対照研究は、川鶴(1999)が挙げられる。川鶴(1999)は、「指示詞の核心的意味」を中心に、「物理的・時間的・心理的遠近」という観点から日英対照を行っている。それによって示された指示詞の使い分けに関する知見は、(1) 英語は話し手の主観によって遠近を決めること、(2) 日本語は話し手と聞き手の両方の要因が働くこと、である。日本語の指示詞の使い分け要因としては、「話し手だけではなく、聞き手の存在」(川鶴 1999: 63)が重要であることが指摘され、英語の指示詞の使い分けには、聞き手要因が日本語ほど重要な役割を果していないことが示唆される。

英語の指示詞の使い分けに、聞き手の役割の必要性を主張した研究は Strauss(2002)などがある。Strauss は、指示詞には対象にどの程度注意を集中させるかを聞き手に伝えるという働きがあり、強調度(focus)を促す程度が this, that, it の使い分けの主要な要因であると指摘している。この指摘によって示されたことは、指示詞の談話的機能から考えた場合、指示詞の使い分けには聞き手に伝える話し手の態度が現れる、ということである。つまり英語の指示詞の使い分けは、聞き手を重視しながらも、あくまでも話し手の主観的な判断によるものであると考えられる。

聞き手の存在は単なる聞き手そのものの存在だけでなく、聞き手がもつ情報(知識)も含まれる。英語の指示詞の使い分けには、聞き手要因が日本語ほど重要な役割を果していない、つまり聞き手知識による使い分けは日本語ほど優先されないことが示唆される。

ここまで述べた指示詞における日英対照研究で

示された知見をまとめると、日英指示詞の使い分けに影響を及ぼす要因において、両者に大きな違いを示すものとしては、「未来」の時制、「聞き手」といった項目が挙げられる。また、照応用法に、両者の使用傾向の根本的な違いも見られる。

4.1.1.2 日本語と中国語

言語類型的に英語と同じ 2 項指示体系を成す中国語の指示詞「这(zhe)」・「那(na)」に関する研究も、Lyons(1977)の遠近説に基づいて解釈された研究が少なくない。これらの研究によると、中国語は英語と同じく、「指示詞は、指示対象が話し手に近いか否かによって使い分けられる」(Zhang 1991: 63)ことが指摘されている。この遠近距離説を物理的な距離のみならず、心理的距離まで拡張した形で、中国語の指示詞の使い分けの解釈を試みた日中対照研究には高(1986)、梁(1986)、中(1989, 1990)などがある。

指示体系の違いから、日中指示詞の対応関係が複雑であることは、従来から多くの研究で指摘されている。その複雑性が反映されている対応関係の一つは、ソ系には中国語指示詞の「这」・「那」のいずれも対応できる(王 1985; 高 1986; 桜井 1966; 菱沼 1984; 望月 1968)、ということである。対訳資料を用いた分析による日中指示詞の対応関係について、王(1985)では、「这ーア」「アー这」の不対応以外は、「这」、「那」はコ・ソ・アの全てに対応していると結論付けていた。高(1986)の研究にもその結論を支持する結果がみられた。しかし、「这」とアとが対応する文例に注目し、日中指示詞の比較対照を行った研究が(中 1989)ある。「这」とアの対応関係を示す例は例えば次の[8]のようなものである。

[8]

一体、あの女の子、誰なんだろう?

这个少女到底是什么人呢?

(中 1989: 427、下線は筆者)

この例は、聞き手がいない場面である。中は、「内言或いは独り言の場合、相手がいなく、頭の中で言葉を使って考えるので、中国語においては「心理的に近い」にあてはまり「这」を使うことになる」と解釈している。しかし、指示対象は知らない相手で、かつ現場にいない場合、「心理的に近い」という解釈には賛同し難い。聞き手がいない場面での中国語の指示詞については、木村(1992)の考え方が妥当であろうと思われる。木村(1992)は「中国語では、その注目の対象と話し手との間の実空間上の相対的な隔たりは捨象され、対象は―恰も被写体のズーム・インにも似て―総じて「近い」ものと認識される、言い換えれば、ワレの領域内のものと認識される傾向が強くなる」(木村 1992: 197)と述べられ、聞き手がいない「独言や内言において“这”が“那”に優先する」(木村 1992: 197)と主張している。

アと「这」の対応可能な関係については、梁(1986)も支持する見解を示している。梁はまた、現場指示におけるコと「那」の対応がほぼ不可能であることを提示している。さらに、中国語の指示詞「这」と「那」の使い分け規則を提案している。空間的・時間的・心理的の遠近関係が「这」と「那」の使い分けの決定的な要因であることを示すと同時に、情報の「既知・未知」という概念を用いた解釈も行っている。それによると、聞き手にもよく知られるもので精神的に近いと感じられるものを指し示すのに「这」、聞き手がまだ知らないものを指し示すのに「那」が用いられる。また、指示対象の存在する場所と発生する時間の客観性が強調されるとき、聞き手が知っているものであっても「这」で指すことができない、と梁(1986)は指摘している。ここでは、話し手と聞き手が持つ共有知識を指し示すのに、日本語では遠称のア系しか用いられないのに対し、中国語では話し手が精神的に近いと感じるときに近称の「这」系を使うことになる。話し手の主観的心理要因が優先される中国語と、聞き手知識を意識した共有知識要因が優先される日本語との間に大きな相違点が見られる。

また、日本語では、話し手と聞き手が持つ共有知識は指示詞を使い分ける重要な要因になるのに対し、中国語では、指示対象が存在する場所や時間といったダイクシス性を持つものの客観性が強調される際は、これらの要因が共有知識という要因に優先されるという点は高(2002b)、王(2004)に示唆されている。高(2002b: 90)では、「中国語では話題的素材が指示対象となるとき、対話者が指示対象を知っているか否かは指示詞の使い分けの基準にならない」と述べられており、日本語と異なり、中国語では、話し手と聞き手の共有知識より、指示対象が先行文脈に現れたかどうかという条件が優先されるとも指摘されている。また、高(2002b)で指摘されたもう

一つの興味深い点は、とりわけ話者と聞き手がともによく知っている人物を指すには、日本語では「あの人」のように、ア系を用いることになるが、中国語では、指示詞よりも三人称代名詞の「他・她(ta)」（彼・彼女）が多く使用されるということである。このように話し手と聞き手が共に持つ共有知識を示す言語環境では、日本語のア系指示詞の必然的な使用と異なり、中国語の使用に多様性が見られ、日中の指示詞の使い分けに影響する要因が異なる特徴が示される。

従来の研究と大きく異なる点として、話し手要因のほかに、聞き手要因も中国語の指示詞の使い分けに影響するという主張(梁 1986)が見られる。中国語の指示詞の使い分けにおける聞き手への配慮は、木村(1992)、Tao(1999)、Huang(1999)などにも示唆されているが、聞き手要因が中国語の指示詞の使用で優先的な要因である有力な根拠は示されていない。

梁(1986)の説を踏まえて、讃井(1988)は日本語の指示詞の分類を参考にし、「中国語の通常の対話距離における対話では、話し手と聞き手は一般にたやすく共通の領域を形成する」(讃井 1988: 5)と述べ、「共通談話領域」という概念を用いて、現場指示用法における「这」・「那」の使用原則を導き出している。それによると、指示対象は「話し手の個人領域＝共通談話領域」にあると見做される場合は「这」が、そうでない場合「那」が用いられる。この「共通談話領域」の形成には、話し手の主観的な心理要因が大きな役割を果たすことがうかがわれる。

木村(1992)は、讃井(1988)の「共通談話領域」に、更に「視点」という概念を導入し、話し手が聞き手と共有の場にあると意識される視点である「包合的視点」、及び話し手が聞き手と非共有の場にあると意識される視点である「対立的視点」[14]とに分けて、中国語の指示詞の使い分けを検討した。包合的視点は、いわゆる讃井(1988)で言う「共通談話領域」と同一のものであり、例えば次のような[9]a のような発話である。一方、対立的な視点の場合は、例えば[9]b のような例が挙げられる。

[9]

a. 自分の目の前にあるバッグを指して、遠く離れた相手に問いかける場合
这个皮包是谁的? (このバッグ、誰の？)
(木村 1992: 206)

b. 慢点!慌什么!好;用劲!怕什么?甭怕他叫唤;用劲往里推!你那边用劲往里拉!
ゆっくりよ！なにを慌ててるの！さあ、しっかり！大丈夫よ。喚いても気にしないで、おもいっきり押して！あんたそっちからおもいっきり引っぱって！
(木村 1992: 190)

木村のこの「包合的視点」と「対立的視点」は、正保(1981)が提示した日本語の指示詞における「融合型」と「対立型」とほぼ同じ構造であると考えられる。正保の考えに従い、[9]b で、融合型視点を取ることになれば、指示対象を自己のなわばりの中にあると見做し、日本語では「この」を用いることになるが、対立型という視点を取れば、指示対象を相手のなわばりにあると見做し、「その」を用いることになる。ところが、中国語では、近称の「这」を使うことができるということから、木村(1986)の指摘通り、中国語の指示体系については、「何よりも話し手の自己本位の視点が幅を聞かせており、たとえ相手(聞き手)の持ち物であろうと、話し手自身に近い存在であれば「这」で指すことが可能」(木村 1986: 32)であり、ワレのなわばり、つまり包合的視点を取ることが優先される傾向があると言える。陳(2004)にも同様な指摘が見られる。即ち、中国語指示詞の選択を決定する要因が、話し手の主観的・心理的要素による影響が大きいことが示される。指示対象への主観性・強烈な感情性を持つ、つまり話し手が自分に強い関わりがあると考える場合に「这」が多用されるということは、奥田(1995)、宋(2002)にも指摘されている。

また、話し手の記憶を指し示すダイクシス性を持つ指示詞の使用については、前述したとおり、日本語においては常に遠称のアが用いられるが、「中国語でもやはり“那”が用いられる」(木村 1992: 198)。牧野(1993)でも同様な結論が示されている。

一方、照応用法についての詳細な論述は菱沼(1984)がある。それによると、(1)「その」が単純に「这」「那」とは対応しないこと、(2)「その」と「这」「那」の機能には相当程度の差異があること、(3)三人称代名詞 ta が照応詞であり、直接前方の文脈の中核となる名詞(モノ)を指示すること、が明らかになっている。また、讃井(1988)では、(1)先行詞の現れる位置が指示詞から近い場合「这」になり、遠

い場合「那」になる、(2)指示対象の存在位置が話し手の視点から近い場合「这」になり、遠い場合「那」になる、ということも指摘されている。そのほかに、話し手によって導入される話題には「这」、新しく導入される話題、主題化される話題には「那」を使うことが多い(Huang 1999; Tao 1999)ことも指摘されている。また、先行詞と照応詞の位置関係から見た場合、中国語においては、前方照応は「这」・「那」の両方が用いられるが、後方照応は遠称の「那」のみ使われている(石井 1998; 宋 2002)。

ここまで述べた指示詞における日中対照研究で示されたことをまとめると、日中指示詞の使い分けに影響を及ぼす要因では、両者に大きな違いを示すものとしては、「未来」の時制、「聞き手」、「指示対象」、そして「共有知識」といった項目が挙げられる。また、照応用法に、両者の使用に異なった傾向が見られる。

4.1.2 日本語 vs.3 項指示体系を持つ韓国語・タイ語

4.1.2.1 日本語と韓国語

韓国語は、日本語と同様に、「이(i)」、「그(ku)」、「저(ce)」という 3 項指示体系をなしている。両指示体系は非常に類似性が見られる(宋 1991)。申(1985b)によると、ダイクシス及び照応のいずれの用法においても、日本語と韓国語の指示詞使用がかなり近似的な体系をなしていることが示唆され、特に聞き手要因は、日本語と同様に指示詞の使用に重要である。つまり、英語、中国語と異なり、聞き手領域要因が韓国語の指示体系にも見られる。

しかし、日韓の指示詞の間で一見体系が類似しているように見えるが、指示領域によって、使い分けに影響する要因が大きく異なることがある。ダイクシス用法においては、いわゆる現場指示における対立型の場合、聞き手領域にあっても指示対象が人であれば、例[10]のように、近称を用いることになる(宋 1991)。つまり韓国語では、指示対象自身の変化も指示詞の使い分けに影響を示す優先される要因になる。日本語には同じような優先される要因は見られない。

[10]

(対座している姉の隣近くに未知の人がいる時)

弟：その方はどなたですか。

i

<이 분은 누구입니까? >

姉：あー、この方はね、私の高校時代の先生。

i

<아, 이 분은, 나 고등학교 때의 선생님. >

(宋 1991: 143)

また、現場指示における融合型では、韓国語の指示詞の使用はほぼ日本語に対応している(安 1999)。しかし、日本語に弛緩したソ系[15]の用法が見られ、この用法は指示対象が場所であることに限定しているという点に特徴があるが、韓国語にはこのような用法はなく、対応する指示詞は中称の ku でなく、遠称の ce になる(金 2000; 宋 1991)。これは今井(2003)の実験調査の結果にも示されている。

[11]

お客：そこの煉瓦の建物の前に停めてください。

tʃɔ gi

<저기 벽돌 건물 앞에 세워 주십시오.>

運転手：そこの角のところですね。

tʃɔ gi

<저기 모퉁이 말이지요?>

(宋 1991: 143)

融合型の特徴は、話し手が聞き手と同一視点を持つため、聞き手領域が消去されることになり、結果として指示詞の使用は聞き手に関与せず、話し手からの相対的な距離によって使われることになる。日本語のソ系は、現場指示の対立型で聞き手領域を示すと同時に、融合型で非近非遠という話し手からの相対的な距離を示すこともできる。韓国語の ku 系は、聞き手領域を指す場合にのみ使われ、聞き手領域の関係しない場面では現れない。従って弛緩したソ系に対応する用法が見られない。韓国語の ku 系指示詞は、聞き手領域専用のものと言えよう。

また話し手と聞き手の共有知識という要因は、日本語ではア系指示の使用をもたらすが、韓国語では ku の使用が導かれる(申 1985b; 宋 1991)。例えば次のような例[12]である。聞き手配慮に関わる共有知識を指し示すのに、聞き手要素重視の日本語と韓国語とでは大きな違いが見られる。

[12]

A：きのう金君にあった。あの人は随分変わった人だね。

<어제 김군을 만났다. 그 사람은 상당히 색다른 사람이야.>

B：あいつは変人ですよ。

<그 놈은 괴짜입니다.>

(宋 1991: 145)

一方、照応用法については、日韓の指示詞用法は殆ど対応しており、前方照応にはi、kuが現れ、後方照応にはiが現れるということである(金 2000; 申 1985b; 宋 1991)。

以上の知見によると、韓国語の指示体系は、その構造に日本語と近似性を持つだけでなく、指示詞の用法においてもかなり類似する点が見られることが分かった。しかし、日本語と大きく異なる点もあり、主にダイクシス性を持つ指示用法における使い分け要因の相異が見られた。具体的には、現場指示融合型の指示用法にku系の使用が見られないことが挙げられ、ku系はソ系より聞き手領域に強く関与していることが言える。また、話し手が聞き手と共有する情報を指し示す指示詞用法は、日本語ではア系を用いるのに対し、韓国語ではku系を用いることになる。聞き手との共有知識によって、聞き手という要素が導入され、結果として聞き手要因に強いかかわりを持つku系を用いることになる。このことから、日本語のソ系より韓国語のku系のほうが機能的により単純であることが示唆される。

また、現場指示の対立型の聞き手領域にある指示対象を指し示す際、韓国語においては指示対象が人であるかどうかという指示対象の違いという要因が強く影響している(宋 1991)ことが見られるが、日本語には特に見られない。

4.1.2.2 日本語とタイ語

タイ語の指示詞は、日本語の指示体系と同様に、NII(近称)、NAN(遠称)、NOON(絶対遠称)という三つの領域観によって3項指示体系が形成されている。「声調の高さの変化や名詞・場所などとの組み合わせによって形に変化も見られる」(パドゥンパッタノードム 2004: 199)。日本語、韓国語と同じく3項指示体系をなしているタイ語は、聞き手領域は日本語、韓国語ほど明確でなく、3項の指示詞もあくまでも話し手からの距離によって分けられている(コンジット 2004)。

日タイの指示詞の使用に指示対象及び聞き手の位置変動による変化を調べた研究は、コンジット(2004)がある。その結果は以下の表3に示す。

表3 現場指示における日・タイ語指示詞の決定要因
(コンジット 2004より筆者作成)

指示詞使用の決定要因	コ	ソ	ア	NII	NAN	NOON
話し手と指示対象の距離	＋	＋	＋	＋	＋	＋
話し手と聞き手の距離	＋	＋	＋	－	－	－

(＋は影響する要因、－は影響しない要因を示す)

ここで示唆されることは、ダイクシス用法において、タイ語の指示詞の使用に決定的な要因を果たすのは、話し手と聞き手との距離ではなく、話し手と指示対象の相対的な物理的距離になるということである。しかし、タイ語は聞き手領域に全く敏感でないというわけでもない。今井(2003)の実験調査によると、例えば、自分の背中をお医者さんが触って「痛いのはここですか」という問いに対しての回答はタイ語では中称指示詞NANを用いる結果が見られた。タイ語においては聞き手領域要因による使い分けへの影響が日本語、韓国語ほど強くないが、場面に応じて優先される要因になることもあることが分かる。

また、パドゥンパッタノードム(2004)は、「話し手との距離、または過去の出来事なら、NANを選び、そうではなければNIIを適用する」(パドゥンパッタノードム 2004: 204)が、出来事の時制が不明の場合や話し手との関係が薄い場合、中称のNANが適用されることが多いと指摘している。

次の例は、話し手Bは聞き手Aと共有している情報を指し示しているにもかかわらず、中称のNANが使われているものである。つまり、日本語の話し手と聞き手の両者にとって共有知識であるかどうかという要因は、タイ語指示詞の使用に優先される要因ではないことが示される。例[13]の場合は、純粋に先行詞を照応することが優先され、話し手が強い関心を示すかによってNIIとNANを使い分け

ている(ワーサナー 1995)。

[13]

A: thii̯ naan partii̯ mɯ́ɯwaan chǎn
cɔɔ khon chɯ́ɯ *yamada*dùilǎ ?
dài yin wàa khon nán yùu
mɯang thai maa lǎai pii lɛ̀ɛw

昨日のパーティーで山田という人にあったんだけど... ソノ人はタイに長年いるそうだ。

B. ɔɔʔ khon nán narɔ̀ɔʔ khǎw phûud
phaasaa thai gêŋ ciŋ ciŋ na

ああ、ソノ人、タイ語も上手だよね。

(ワーサナー 1995: 317)

一方、遠称 NOON の指示用法にも、共有知識という要因によって使い分けられる用法が見られず、過去という時制要因のほうが優先される要因となる(ワーサナー 1995)。

[14]

「傷の話」

A ：nân plɛɛʔ mɯarái rəə
それ、いつの傷なの？

B ： *ɔɔn pai lên sakii̯ nǎ*
修学旅行の時スキーで怪我したの。

A ： aa tɔɔn noon rɯɯ ?
アノ時の傷なの？

(ワーサナー 1995: 318)

照応用法において、前方照応では、話し手が導入する話題であれば、コ系を用いるが、コ系を用いることによって、具体的な説明が期待される。タイ語も同様の NII を用いる。しかし先行詞が聞き手の発話にある場合、日本語ではソ系しか用いられないが、タイ語では NAN のほかに、話し手が自分に強い関わりをもつと判断した場合は、NII を使うことも可能である(ワーサナー 1995)。つまり、タイ語には英語や中国語でも見られるような話し手の主観的判断要因が強く影響する。例えば[15]のような例が見られる。

[15]

(A は父に土地の話をする。それについて何も分からない妹 B がいる。)

A ：sanǎam kɔɔf kap bàan táakaakat thúuk nai *wattchaleɛ* khûu práp yêeŋ sùɯ pai lɛ̀ɛw

ゴルフ場やリゾート地を作るための土地が父さんのライバルの*ワッシャレ*にとられちゃったんだよ。

B ： khrai kha phii nai wattchaleɛ nii na?
コノ ワッシャレってどんな人。

A ：nɔ̀ɔŋ ɔɔn pèŋ kiap caak mɯɯŋ nɔɔk khoŋ mai rùu wàa nai khon nii khɯɯ khûu prap kao khɔɔŋ khun phɔ̀ɔ caw

君は海外から帰ったばかりだから、知らないはずだ。コノ人は父さんの宿命のライバルだ。

(ワーサナー 1995: 316-317)

上記の B の発話のように、先行詞が対話相手の会話に現れて、自分の知らない情報にも、話し手が「自分に関わりが強いと認定」(ワーサナー 1995: 317)すれば、中称の NAN ではなく、NII が使われえる。また、前述の文章を繰り返すときの代用語としては NII と NAN の両方が用いられるが、NII は話し手が自分に関わりが強いと思うときに用いられ、NAN は単純に照応するときに用いられる(パドゥンパッタノードム 2004)。なお、NOON による照応用法は見られない(パドゥンパッタノードム 2004)。これを示す例は[16]である。

[16]

cà?-mây klàp prathêt ? nii/nân thəə phûut ciŋciŋ rii ?.

帰国しないって？君は本気で言ったんですか。

(パドゥンパッタノードム 2004: 203; 下線は筆者)

また「文脈上の対象(場所と時点)を指示する場合、NII、NAN、NOON を用いるが、他の対象(人と事柄)を指示する場合、NII、NAN しか用いられない」(ワーサナー1995: 316)ことも指摘されている。つまりタイ語では、指示対象自身の性質が指示詞の使い分けに影響する要因となる。なお、後方照応は、

タイ語も日本語と同じく近称のNIIを用いることになる(ワーサナー 1995)。

以上の知見をまとめると、ダイクシス性に注目した場合、話し手と指示対象との距離は、日本語、タイ語のいずれの指示詞の使用においても影響が示されているが、聞き手との距離による使い分けは、日本語には見られるが、タイ語には見られない。言い換えれば、同じ3項指示体系でありながら、日本語の指示詞の使用には、聞き手要因が優先されるのに対し、タイ語はあくまでも話し手要因のほうが優先されることが示唆されている。また、日本語の指示詞に見られるア系使用に関わる共有知識による使い分けは、タイ語では使い分けの優先要因とはならない。

4.1.3 多言語の同時的な考察

多くの言語の指示詞の使用を実験的に調査した研究に今井(2003)がある。今井は、空間指示詞領域(話し手領域・聞き手領域)の決定要因を求め、11言語のインフォーマントによる実験的研究を行った。話し手領域を決めるパラメータを「話し手からの相対的距離」と「コントロール」に分け、聞き手領域を決めるパラメータを「話し手と聞き手の二重アンカー型」と「聞き手アンカー独立型」とに分けて調査をした。その結果、いくつかの興味深い知見が得られた。

まず、話し手からの相対的距離によって分割される領域は、同じ3項指示体系でも日本語ではコ・ソ・アの3つとなっているが、タイ語、韓国語は日本語と異なる傾向を示し、2分割となっている[16]。その中でもタイ語では聞き手領域が日本語ほど重要でないことが示唆されている。一方、韓国語については、いわゆる中称のkuは、「「聞き手領域」を表わすため専用のものであり、話し手からの「相対的距離」を表わすことはない」(今井 2003: 208)ということが明らかにされた。

次に、話し手領域のコントロール要因を「直接接触」、「間接接触」、「(非接触)間接コントロール」に下位分類にして調べた。その結果、話し手のコントロール性をもって話し手の領域を決定する傾向はタイ語が最も強く、英語が最も弱いことが明らかになった。主な言語のコントロール性依存度の度合いは、タイ語＞日本語＞韓国語＞英語、という順番になっている。

また、例えば医者が患者の背中を触って「(痛いのが)ここですか？」というような発話をし、患者が「はい、そこです」という返答をする場面では、聞き手領域をもつ指示体系の言語の多くは、中称の指示詞が使われる傾向が確認された。一方、聞き手領域を持たない英語では、遠称のthereが使われた。英語やアラビア語、カンボジア語などは、聞き手領域を持っていなくても、「聞き手領域にセンシティブでありうることを示唆している」(今井 2003: 212)と述べられている。また、同じく聞き手領域を持たない中国語、ハンガリー語などは、同様な場面でも近称を使う「非聞き手アンカー言語」が見られた。つまり、同じ2項指示体系を持つ英語と中国語でも、聞き手領域への敏感度に差があることが示唆されている。

話し手領域の決定要因は「コントロール」が一次的要因であり、「相対的距離」は二次的要因である。聞き手領域も「コントロール」が領域決定の主要因である。話し手領域の決定要因は「直接コントロール」であり、このパラメータは普遍的である。聞き手領域の決定要因は言語毎にバリエーションがあり、言語特殊性(個別性)が見られる。

4.2 談話理論による考察

近年日本語の指示詞について、意味論・語用論の観点から、他言語との比較をしながらの研究(金水 1988, 1999; 金水・岡崎・曺 2002; 金水・田窪 1990, 1992; 田窪 1990a, 1990b; 田窪・木村 1992; 田窪・金水 1996; Hoji, Kinsui, Takubo & Ueyama 2003; Takubo & Kinsui 1997)が進められるようになってきた。特に金水・田窪(1990)以降の研究は、その理論的な基盤となっているのが談話管理理論である。それに基づいた日本語のモデルは、「談話情報のデータベースとしての心的領域を直接経験的領域と間接経験的領域に二分し、かつ聞き手の知識・知覚等を間接経験的領域に埋め込まれているとする仮説」(金水・田窪 1992: 191)として提示されている。

談話管理理論では、談話に関与する話し手の知識を少なくとも二つのタイプに分割し、それぞれの知識を格納する領域を直接経験的領域(D-領域)、間接経験的領域(I-領域)と名付けている(金水他 2002; 田窪 1992; 田窪・金水 1996)。D-領域は、長期記憶とリンクされ、「長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される」(田窪・金水 1996: 66)。I-領域は、一時的作業

領域とリンクされ、「まだ検証されていない情報(推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報)とリンクされる」(田窪・金水 1996: 66)ことになるという。日本語では、D-領域にはコ系とア系が現れ、I-領域にはソ系が現れる。I-領域には、「聞き手の知識・知覚」が包含されている。また、複数の系列の指示詞が使用可能な文脈において系列間の使用優先順位があることが発見され、それは「指示トリガー・ハイアラーキー」と名付けられている(金水・田窪 1990)。日本語の「指示トリガー・ハイアラーキー」は、「現場＞経験スペース＞＞その他」(金水・田窪 1990: 111)になる。つまり複数の系列の指示詞が使用可能な文脈においては、日本語の指示詞の選択要因に「ダイクシス性優先」[17]という特徴が見出される。具体的には次のような現象である。

[17]

a. 私は10年前1冊の本を書いた。

b. {その本／？あの本}は人々に高く評価され、賞をとった。

c. それがこの本だ。

d. {この本／＊その本}は今でも多くの学生に読まれている。

(金水・田窪 1990: 183)

aで導入された「1冊の本」はbではまだ聞き手がそれを知らないので、原則的にソ系が用いられる。しかし、この特徴は、日本語と他言語の間で差異が見られ(金水 1999; 金水・田窪 1990)、例えば韓国語[18]では弱くなること(金水 1999)、英語では見当たらないこと(金水・田窪 1990)などが、他言語との比較を通して明らかになった。金水・田窪は、この日本語のモデルは「外国語と比べた場合に鮮明なコントラストを生じるという点で言語学的に興味深い」(金水・田窪 1992: 183)と述べ、日本語のみならず2項指示体系を持つ英語、中国語、3項指示体系を持つ韓国語、トルコ語[19]との対照研究を通して談話理論に基づいて、指示詞の使い分けに関する解釈を試みている。

金水などの一連の研究によると、日本語の特徴に関して、概ね次のようなことが示されている。ダイクシス用法においては、コが「近称」、アが「遠称」と捉えられ、話し手からの距離によって特徴づけられ(金水 1999)、使い分けは明確で指示領域が安定しているが、ソは、遠近によって捉えられることはない(金水 1999; 金水他 2002; Hoji et al. 2003)。

一方、照応用法においては、「厳密な意味での言語的な先行詞に依存して指示対象が決まると言えるものはソ系列のみ」(金水他 2002: 226)であり、その指示領域が安定しているが、コ系列とア系列は共にダイクシスの性質が色濃く残されており、ダイクシス用法の拡張である(金水 1999; 金水他 2002)。

金水(1988)は、指示詞の使い分けを検討するために、話し手要因と聞き手要因を、遠近という視点で日本語と中国語、英語、韓国語の比較を行った。その結果、例えば普通の日常的な対話で、相手の身につけているものを指すような対立型の場面においては、日本語では中称のソ系でマークするが、英語では遠称の指示詞を用い、中国語では近称の指示詞を用いる傾向が見られる[20]。また、韓国語については、日本語とほぼ同じ分布を示すが、照応における ku の分布が日本語のソと異なる点が見られ、韓国語では「一旦談話に現れた対象は、特に指示を強調しないかぎり ku を用いる。つまり ku は機能的に、英語の代名詞により近い」(金水 1988: 126)[21]と述べられている。同じ指示体系をなす英語と中国語の違いについて、金水・田窪(1990: 107)では「対立的視点への感受性の違い」と説明されている。

田窪(1990b)は、対話における「知識の取扱」及び「聞き手の領域」という要素に関して、日本語、中国語、英語の三人称代名詞の使用規則を比較対照している。前述したように、「共有知識」の取扱及び「聞き手の領域」は日本語の指示詞の使い分けにかかわる重要な要因である。その点について英語と中国語でどのようになっているのか、この研究においてより明示的に提示されている。それによると、「知識の取扱」と「聞き手の領域」は、日本語の場合は両要因が同時に働く重要な要因であるが、中国語の場合はあくまでも話し手要因が先行する要因になるため、この二つの要因はさほど重要な役割を持たない。また、英語の場合は、話し手要因が重要である一方、聞き手領域にも敏感であり、知識の取扱は中立的になる。同じ指示体系をなす中国語と英語においても違いが見られることが分かる。

また、田窪(1990a)では、「知識管理」の枠組みに基づいて、英語と韓国語を分析した。その結果、「談話の初期値に潜在的に導入される要素は日本語

と他の言語で微妙に異なる」(田窪 1990a: 844)ことが指摘されている。その具体的な差異は、「日本語では、原則として、「あ」系列の指示詞は、話し手が共通の知識内にあると判断した事物にしか使えない。相手が導入した自分にとって未知の知識は「そ」系列の指示詞で指す」(田窪 1990a: 842)ということになるが、「英語では、話し手、聞き手の知識とは一応独立した指標として代名詞が使われる。韓国語の場合もほぼ同じである」(田窪 1990a: 842)ということになり、談話構造においては、日本語は言語場(話し手・聞き手知識との諸要素)に依存しているのに対し、英語や韓国語では、この言語場から独立したものとして存在していると言える。金水・田窪(1990: 112)でも「日本語よりも英語に近い談話構造の独立性が朝鮮語に認められる可能性が高い」と同様の指摘がなされている。ここでも、日本語の指示詞の使い分けに、いわゆる言語場面に依存する話し手と聞き手の共有知識という要因が重要であること、英語と韓国語の指示詞の使い分けにはそれが重要でないことが示唆されている。

英語に重要とされる指示詞の使い分け要因を、金水・田窪(1990, 1992)の「直接経験知識と間接経験知識」という概念を用いて分析したのは、Niimura & Hayashi(1994)、新村(1998)である。Niimura & Hayashi(1994)では、日本語では、「話し手の経験知識」は「一つの指示対象に対して複数の選択が可能な場合は、real 空間（物理的近い）が優先される」(Niimura & Hayashi 1994: 332)ことが重要であるのに対し、英語では「一番目に重要なのは「FOCUS(強調度)」もしくは「指示対象に向けられる注意度」(Niimura & Hayashi 1994: 332)、またその下位要因として「①話し手に利用される聞き手と共通する情報の量、②話し手にとっての指示対象の重要度」(Niimura & Hayashi 1994: 332)が挙げられ、英語では日本語のようなダイクシス優先という原則が対応できないことが指摘されている。また、新村(1998)では、話し手と聞き手の共有知識は「ア」系指示用法は日本語独特の使い方であり、英語では表現しにくい、あるいは表現できないような意味・機能を持つと述べられている。

そのほかに、金水他(2002)はそれまでの「成果に立脚しつつ、日本語と似た3系列の指示詞を持つ韓国語に分析を広げ、その類似点・相違点について」(金水他 2002: 217)探った研究である。それによると、近称においては、3 言語(日本語・韓国語・トルコ語)ともよく似ており、殆ど差がなく、遠称においては、概ね似ているが、韓国語の場合は、「今、眼前及びそれに準ずる空間で、話し手から遠い対象を指す」(金水他 2002: 238)ということで、日本語のア系の様相と異なることが述べられている。また、中称の指示詞のダイクシス性を持つものについては、「何らかの形で、間接的であったり、新規導入知識であったりするなど、典型的な直示からかなりはずれた用法になっている」(金水他 2002: 243)と述べられ、照応用法については、特に日韓の中称指示詞は「文脈照応用法において、安定した用法を持っている」(金水他 2002: 243)と示されている。

この一連の研究から、言語の違いを問わずに共通して見られる指示詞の使い分け要因は、ダイクシスにおける話し手からの近称が挙げられる。一方、同じ2項指示体系をなす英語と中国語、同じ3項指示体系をなす日本語と韓国語は、言語によって異なる要因が働くことが確認されて、言語による要因の多様性が示されている。

4.3 4章のまとめ

ここまでは、2 項指示体系をなす英語、中国語、3 項指示体系をなす韓国語、タイ語を中心に、日本語の指示詞との対照研究を中心に見てきた。いずれの言語においても、話し手要因(とりわけ近称における)の影響が見られ、実験的研究においてもその重要性が示されている。指示対象という要因の使い分けへの影響は言語によって異なることも示されている。また、聞き手要因についても、その指示詞の使い分けへの影響は言語によってばらつきが見られた。「話し手」「指示対象」「聞き手」という 3 つの要因は、指示詞の使用における最も根本的で直接的な要因であると考えられる。「話し手」要因はより普遍性を持つこと、「指示対象」「聞き手」要因は、より言語的個別性、複雑性を持つことが示唆されている。特に、「聞き手要因」は、他言語に比べて日本語で指示詞の使い分けに強い影響が見られる。韓国語でも聞き手要因の影響が見られたが、日本語に比べてそのかかわりがより単純である。日本語のほうが聞き手要因の重要さ、複雑さが示されている。

そのほかに、上述した 3 つの根本的な要因に関連する重要な要因として、「話し手要因」にかかわる「話し手の心理的距離・関与・評価など」の要因、「指示対象要因」にかかわる「時間・空間・出来

表4　日本語と英語・中国語・韓国語・タイ語

	指示詞の選択要因	日本語			英語		中国語		韓国語			タイ語		
		コ	ソ	ア	this	that	zhe	na	i	ku	ce	NII	NAN	NOON
ダイクシス	遠近(話し手からの)	+	+	+	+	+	+	+	+		+	+	+	+
	過去(時制)		+	+		+		+			(+)			+
	現在に近い(時制)	+			+		+							
	未来(時制)		+		+			+						
	聞き手領域		+			(+)				+				
照応	前方照応	+	+		+	+	+	+	+	+		+	+	(+)
	後方照応	+			+		+		+			+		

(「+」は影響する要因、「(+)」は条件付要因であることを示す。)

事・人物・照応詞位置など」の要因、「聞き手要因」にかかわる「聞き手によって導入される知識、聞き手しか知らない知識、聞き手と話し手との共有知識」などの要因が挙げられる。指示詞の使い分けは複雑で、同時にいくつかの要因によって影響される場合があるが、最優先される要因は言語によって異なる可能性が示されている。

ダイクシス用法においては、同じ 2 項体系をなしていても中国語と英語では、聞き手領域への敏感度、話し手の心理的要因の強さ、時制がもたらす表現などによる違いがある。また、同じ 3 項体系であっても日本語、韓国語、タイ語の間に、聞き手要因の優先度のほかに、指示対象の存在や人間性、話し手の主観的な関与度などによる違いが見られた。

また、照応用法において先行詞と照応詞の位置関係を見た場合、後方照応は、近称の指示詞によって表わされるという普遍性が見られる。指示詞の選択要因に関して本稿で分かった主な知見を言語別に一覧にしてみると、表 4 になる。

また、前述した「話し手と聞き手の共有知識」が指示詞の使い分けに与える要因と考えられる言語は、日本語、韓国語のみであり、2 項指示体系の英語、中国語、及び日本語と同じ 3 項指示体系のタイ語にはこの要因の強い影響が示されていない。また、この話し手と聞き手の「共有知識」という要因は、日本語と韓国語の指示詞の使用に影響を与えてはいるが、結果として用いられる指示詞は全く異なる。日本語ではア系しか用いられないのに対し、韓国語では中称系指示詞の ku が使われる。つまり、「話し手と聞き手の共有知識」を指し示すときに遠称のア系指示詞を用いるのは、日本語にしか見られない用法であり、日本語の個別性を示すものである。

照応は、ダイクシスから拡張される用法である(金水 1999; Lyons 1977)ことは各言語においても共通しているが、拡張の仕方は言語によって異なることがあり、必ず指示詞を伴って現れてくるとは限らない。例えば、日本語の場合は、主に指示詞を用いて照応するが、英語の場合は、定冠詞や三人称代名詞の使用がより普遍的であり、中国語の場合は、三人称代名詞が使用されるほか、指示詞の使用に多様性が見られる。

定冠詞の形成を歴史的にさかのぼると、定冠詞を持つ多くの言語は、その冠詞が指示詞から生じることが分かってきている(工藤 2003)。指示詞の反復機能が強調的に用いられ、発音が磨滅することなどで指示機能が弱まり、冠詞的なものになるということである。また、日本語の場合は、工藤(2003)は指示詞と助詞の係わり合いを指摘する仮説を提示した。「印欧語では指示代名詞は冠詞と結び、その機能の一端は日本語では助詞で表わされている」(工藤 2003: 80)といい、格助詞のガが二人称代名詞ナ(汝)からの音韻変化による発展してきたと推定している。特に印欧語との対照研究に関しては、指示詞のみならず、冠詞を含めたより統合的な検討が必要であろう。また、工藤(2003)で示された日本語の助詞と指示詞の関係の仮説についての更なる検討が期待される。

5. 指示詞の習得研究の知見についての再検討

この章では、これまで概観してきた対照研究から得られた知見が、日本語学習者の指示詞の習得研究にどのように結びつくかについての検討を試みる。

5.1 第1言語要因—言語転移の可能性の再検討

4章で述べたように、本稿でレビューした比較対照研究では、いずれの言語においても、ダイクシス用法における話し手要因の影響が見られ、実験的研究においてもその普遍性が示されている。特に話し手にとって物理的に近い場合に近称の指示詞を用いることは、殆どの言語に普遍的に見られている。2.2で紹介した日本語の指示詞習得の研究においても、この用法(特に現場指示融合型のコ系)に関する誤用はあまり報告されておらず、いわゆる言語間の正の転移の可能性が示唆されている。

また、習得研究では韓国語を母語とする学習者のソ系使用、とりわけダイクシス用法の現場対立型のソ系が初級段階からも正用率が高いことが報告され、正の転移の可能性が推察されている(安 1996, 1998; 渡邊 1996)。対立型現場指示では、(1)聞き手領域が中称指示 ku と強い関わりを持つ点が日本語と一致すること、(2)その特徴が 2 項対立指示体系の英語、中国語、3 項対立指示体系のタイ語に見られないこと、この 2 点から、韓国語の ku 系による正の転移という仮説の妥当性があると言えよう。

日本語の指示詞の使い分けに聞き手要因が重要であることは今まで概観してきたとおりであるが、指示対象自身の性質や変化による弁別は優先される要因ではない。しかし、多くの言語においては、指し示している対象が人なのか事柄なのか、現場から消えたばかりのものなのかどうか、指示対象の存在場所、発生時間の客観性が強調されているのかなど、指示対象がどのように認識されるのかによって指示詞の使用が異なる。このような指示対象に注目し、指示詞の判断を行う言語習慣を持つ学習者は、日本語の指示詞を使い分ける際に、母語知識に依存する可能性が大きいと思われる。

日本語の指示詞の習得研究では、「母語転移＝2項対立からの影響」という論考が多く見られる。学習者の談話展開のスタイルを調査した渡邊(1996)では、韓国人学習者、ドイツ人学習者は日本人母語話者同様にソ系照応を用いるのに対し、中国人学習者はア系を用いる誤用が多いことが観察された。渡邊は、韓国人学習者、ドイツ人学習者の結果について、韓国語は照応体系が日本語に極めて似ていること、ドイツ語は定冠詞が照応を示すことが多く、定冠詞と指示詞との境界が微妙であることを根拠に、母語からの正の転移と解釈している。そして、中国人学習者の結果については、指示体系が大きく異なることから習得が難しくなると述べている。しかし、中国語はドイツ語と同じく2項指示体系である。同じ指示体系をなしているにもかかわらず、異なった結果が示されたことになる。従って、母語転移の要因は確かに大きいと考えられるが、指示体系の違いだけで、学習者の習得に見られる異なった結果を解釈することはできないだろう。本稿で得られた知見を付け加えると、次のようなことが考えられる。前述したように、単純照応の場合は、中国語でも英語のような三人称代名詞を使用することがあるが、あまり一般的でない(Zhang 1991)。その代わりに、「这＋＋NP」と「那＋NP」が多用され(Miura & Christensen 1991)、新しく導入される話題や主題化される話題には中国語では「那」を使う傾向がある(Tao 1999; Huang 1999)。つまり、日本語ではモノローグの発話は照応性が重視され、一貫したソ系が用いられるが、中国語では、話し手の視点の変化に応じて、文が主題化される傾向がある。この特徴は、渡邊(1996)で提示されている中国人学習者の母語による発話にも見られている。中国人学習者は母語の方略を過剰に目標言語の日本語に適用し、結果として遠称のア系が選ばれることになるということがうかがわれよう。つまり、単に指示体系の違いだけでなく、母語方略の過剰使用による結果であると思われる。

そのほかに、学習者の指示詞コソアの全体的な使用量について言及した新村(1992)では、英語を母語とする学習者の指示詞の使用に回避傾向が観察され、日本人による英語作文や会話には、指示詞の過剰使用が見られた。また、浅井(2004)では、日本語の論説的文章における指示詞「この」「その」について、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の使用を比較したところ、日本語母語話者より中国人学習者の使用が少ないことが報告されている。指示詞の絶対的な使用量については、4.1.1 の冒頭で述べたように、英語や中国語は日本語ほど多くない。そのために、学習者の日本語の指示詞の無意識的な使用回避が生じたと考えられる。これらの結果は母語の使用方略の差異によって生じたものと思われる。

なお、母語方略の使用や母語転移の可能性は、目標言語能力による違いが見られる。新村(1992)では使用回避は中級段階に見られ、渡邊(1996)では母

語方略の影響は中上級の学習者に確認されている。また、安(2001)では、初級段階の学習者が最も母語の影響を強く受けることが指摘されている。母語の影響を検討する際に、目標言語能力によって母語がどの程度目標言語に影響するのかといった視点からの分析も重要である。

5.2 目標言語要因

2.2 で示した習得研究では、負の転移が示唆される項目として、話し手と聞き手の共有知識を示すア系をソ系にする用法が挙げられている。しかし、この負の転移と言われる用法は、実は異なる母語を持つ学習者の間に確認されている。前述したとおり、話し手と聞き手の共有知識という要因は、聞き手への配慮、つまり聞き手領域要因に密接に関わっている。今回概観した言語では、2 項指示体系の英語や中国語、そして、3 項指示体系のタイ語は、聞き手要因がさほど重要でなく、話し手の主観的な判断や、指示対象が人であるかどうか、などといった要因によって指示詞を使い分けていることが明らかになっている。一方の日本語と指示体系が最も近い韓国語においては、指示対象が聞き手との共有であるかどうか、という判断要因が見られるが、もたらす指示詞が日本語と異なって、いわゆる遠称の ce 系を用いるのではなく、中称の ku 系によって表現される。つまり、ほかの言語に比べて、日本語に見られる共有知識に使われるア系は、日本語独特な使用であり、個別性を持つ項目であることが言える。指示詞コソアの中間言語の形成を調べた研究では、ソ系とア系の使い分けの難しさが指摘されており、その難しいとされる原因はア系にある、という指摘がある(迫田 1993b)。このようなア系の使用が学習者にとって困難で習得が遅れることは日本語の指示詞の習得研究(安 1996, 1998, 1999; 迫田 1996a, 1996b, 1997b; 宋 1999; 田窪 1987; 単 2003a; 新村 1992; ワーサナー 1995 など) で多く指摘されているが、前述したように、日本語の個別性によるものである可能性が高いと考えられる。つまり、話し手と聞き手がともに良く知っている内容を指し示す際に、「指示対象が既に先行文脈に現れた」、「聞き手によって導入される話題」などの照応性の持つ弁別要素より、日本語の指示詞は「話し手と聞き手の共有知識」という弁別要素が先行する可能性が大きい。これは金水(1999)で提示されている日本語の指示詞の「ダイクシス性優先」という原則に関わっているかもしれない。学習者の日本語の指示詞の使用は、「指示対象が既に先行文脈に現れた」、「聞き手によって導入される話題」などの照応性や、「過去の出来事」というダイクシス性の弁別要素が先行するという母語の指示詞に関する既成文法知識に影響され、誤用が生じると考えられる。つまり、文脈の環境の違いによって、日本語の原則とは異なったルールを用いている可能性が考えられる。

迫田(1996b)は、日本語の指示詞における「話し手中心の立場」(＝聞き手配慮無)と「聞き手中心の立場」(＝聞き手配慮有)を取り上げ、黒田(1979)の「直接的知識」・「概念的知識」という概念を用いて、それぞれの立場におけるソとアの使い分けの比較を行った。その結果は次の表 5 のようにまとめることができる。

表 5　日本語の指示詞ソとアの使い分け
(迫田 1996a: 48 を著者が簡略化した)

	話し手にとっての(S)	聞き手にとっての(H)	使用指示詞
①	直接的知識(共通知識)		ア
②	直接的知識	—	
③	直接的知識	概念的知識	ソ
④	概念的知識	直接的知識	

(S＝話し手、H＝聞き手)

迫田(1996b)では、学習者にとって、ソ系とア系の使い分けが難しい原因は、S①(＝S②＝S③)という一つの領域(ア系の領域)から、聞き手への配慮によって、H①と H③という 2 つの領域(ア系の領域とソ系の領域)に変化したことにある、と指摘されている。つまり、「聞き手への配慮」要因はソとアの使い分けを難しくする要因の一つである。この結論に本稿で示された知見を加えると、次のような示唆が得られると思われる。

2 項指示体系をなす英語、中国語や、3 項指示体系でもタイ語においては、「聞き手への配慮」という要因は日本語、韓国語の場合ほど指示詞の使用に強く影響を及ぼさない。また、話し手と聞き手の共通知識という要因による使い分けが、英語、中国語、タイ語では優先されない。従って、日本語の指示詞の使用に当たって、「聞き手への配慮」という要因の優先も、「話し手と聞き手の共通知識」による弁別も難しくなることが考えられる。一方、日本語と同様に「聞き手への配慮」要因が重要である韓国語

においては、話し手と聞き手の共通知識要因によって用いられる指示詞は、いわゆる遠称の ce ではなく、ア系と性質が異なる中称の ku になる。申(1985b)、安(1998)では韓国人学習者が共有知識を指すア系をソにするという誤用現象が指摘され、それらの誤用は韓国語による転移であると結論付けられている。転移の形成が目標言語の使い分け要因の特殊性に起因していると考えられる。

また、指示詞コソアの習得研究で指摘されてきたソ系をア系にする誤用、特に聞き手が良く知らない事柄を指すときのソ→ア誤用は、学習者の母語を問わず、普遍的に見られる現象である。しかし、表面上ソ→アという誤用現象の背後には、学習者方略が関わる使用パターンが存在する可能性(迫田 1997b; 単 2003b)が報告されている。迫田(1997b)は、韓国人学習者と中国人学習者のソ系とア系の使い分けに、指示詞の後ろに結合する名詞が抽象的な名詞の場合はソ、具体的な名詞の場合はアにする傾向があることを発見した。また、単(2003b)は、中国人学習者を対象とした調査を通し、照応用法においては、先行詞がモノ(人も含む)である場合誤用であるア系にし、先行詞が出来事や場所、時などの場合正用であるソ系にする傾向があることを示した。これらの報告から、日本語の指示詞の使用に学習者が指示対象(先行詞)の性質に注意を向けている可能性が示唆される。前述の通り、指示詞の使用に指示対象自身の性質や変化などによる使い分けが優先されることは多くの言語で確認されているが、日本語ではほかの言語に比べてあまり重要ではない。指示詞の使い分けに複数の要因が関わるときに、指示対象の性質や変化などが優先されにくいという日本語の個別性が見られる。従って学習者のソ系使用は、日本語の優先とされる要因に一致しないほかの要因で判断し、日本語のルールに偶然に沿うものであれば正用となり、違反するものであれば誤用となる可能性が大きいと考えられる。

もちろん、上記に述べたのはあくまでも仮説であり、より多くの言語の指示体系で学習者のデータを通して検証する必要があると思われる。しかし、少なくとも、このような可能性があることは、学習者言語を分析する際の一つの参考になると考えられる。言語によって指示詞の選択に優先する要因が同じこともあれば異なることもある。優先する要因が同じであれば、正の転移を促進することになるが、優先する要因が日本語の原則と著しく異なる場合は、誤用を起こす可能性が大きくなると考えられる。Nimura & Hayashi(1994)が指摘しているように、同時にいくつかの要因が指示詞の選択に影響を及ぼす場合、一番優先とされる要因の違いを教育において提示することが重要であろう。

5.3 「マルチリンガリズム」という新たなパラダイムからの検討

長友(2003)は、今日の日本語は、第 2 言語としてではなく、第 3 言語もしくはそれ以上のものとして習得される場合のほうが多いことを指摘し、多言語習得・マルチリンガリズム環境での日本語教育のあり方について、新たなパラダイムで言語習得を検討する必要性を主張している。

日本語の指示詞の習得も同様の状況にある。日本語を習得する前に、既に母語以外の言語を習得する経験がある学習者は少なくない。マルチリンガリズムという大きな観点から考える場合は、外国語(第二言語)学習者は広義に「マルチリンガル(バイリンガル、トライリンガルも含む)」と見做すことができる。その習得が成功していれば、いわゆる世間でいう「バイリンガル」や「トライリンガル」になる。日本語の指示詞の習得は、学習者の母語を問わず、習得が難しい項目の一つであることは既に先行研究で指摘されており、母語で定着した観念が目標言語に強く影響することも示唆されている。では、いわゆるバイリンガルやトライリンガルはどのように指示詞を習得するのだろうか。とりわけ指示体系が大きく異なる複数の言語を同時に習得するときに、指示詞はどのようなプロセスを経て、最終的にどのような結果になるのであろうか。これらの観点を取り入れた日本語の指示詞の研究としては白井・Patschke(2000)と単(2004)が挙げられる。

白井・Patschke(2000)は、英語と日本語の二言語併用児の発話資料を用いて幼児 5 名の日本語と英語の指示詞の発達を調べた[22]。その結果を表 6 に示す。

それによると、幼児の指示詞の使用は、日本語と英語のいずれも、現場指示用法が先に出現している。8 歳児に聞き手領域に関する理解を示す非現場指示の「それ」や“that”の使用が現れる。全体的に、日本語においても英語においても、指示詞の発達はダイクシスから照応へというルートをたどっていることが示唆されている。

単(2004)は、日本人トライリンガル(英語、スペイ

表6　英語と日本語二言語併用児の指示詞の発達
(白井・Patschke 2000 より筆者が作成)

	第1時期	第2時期	第3時期	第4時期	第5時期
コ	○	○	○	○	○
ソ		△	△	○	○
ア	○	○	○	○	○
this	○	○	○	○	○
that		○	○	○	○

(○＝出現時期、△＝現れているものの不安定。)

ン語、日本語)1 名を対象に、タスクによって抽出したモノローグ的な発話及び自然発話の 2 種類の発話データを用いて、その日本語の指示詞の使用を調べた。その結果、日本語学習者に誤用が多いと報告されている照応用法のソ系は適切に使用されていることが確認された。一方、ア系の使用は少なく、聞き手と共感できる情報が乏しいことが見られたが、全体的に、被調査者の会話における指示詞コソアの使用は、日本語母語話者に近いことが示唆された。

しかし、上記のいずれの研究も、記述や報告のみに留まっており、その指示詞の発達に言語間の影響があるのかどうか、また、それぞれの言語の指示体系がどのように形成されていくのかはまだ明らかにされていない。今後、より多くの研究によって明らかされることを期待したい。

6. おわりに

本稿は、日本語の指示詞を取り上げ、日本語と同様の指示体系をなす言語、及び異なる指示体系をなす言語の比較対照研究を中心に、日本語教育の視点から概観を試みた。指示詞に関して言えば、言語類型論的に見た場合、日本語も英語も、中国語も韓国語も、タイ語も特殊な言語ではない。しかし、日本語の指示詞コソアを習得する際に、比較的容易な項目とそうでない項目があることは多くの研究によって明らかにされている。本稿ではその原因が日本語自身の指示詞の使い分けに影響する要因の普遍性及び個別性によるものである可能性を示唆した。さらに、他言語との比較を通して、日本語の指示詞の特徴がより浮き彫りになることも示した。

なぜ異なる母語を持つ学習者の日本語の指示詞の習得に、同じような誤用が観察されるのだろうか。その誤用箇所は日本語の指示詞にしか見られないような、いわゆる日本語の特殊性が見られるところであるかもしれない。しかし、それは他言語との総合的に比較することによって初めて分かることである。日本語の指示体系は、特に 2 項指示体系の学習者にとって理解しにくいものであるかもしれないが、日本語と同様の 3 項指示体系を持つ言語の学習者にとっても日本語の指示詞の習得がさほど容易なものでないことから、日本語の指示詞の習得が難しい理由は、指示体系の違いだけでは説明ができない。指示詞の使い分けを判断する際の基準がより大きな影響要因であると考えられる。ダイクシス的な要素が優先される可能性、また多くの言語で使用される三人称代名詞の代わりに日本語では指示詞を用いるというギャップ、逆に日本語では指示詞を使わない場面での指示詞の使用の可能性など、理由はさまざまで複雑な要素が絡んでいるが、そこには一定の傾向があることを本稿で示唆した。

本稿で概観した対照研究は、談話中心のものが多かった。佐々木(1997)では、日本人母語話者の指示詞の発達順序は、書きことばと話し言葉で異なることが示されている。また、指示詞に関わる結束性の問題については、テキスト理論に基づいた一連の重要な研究(庵 1995, 1997, 1998; 堤 1998; 三枝 1998 など)があるが、比較対照研究があまりなされていないため、本稿では言及することができなかった。学習者の作文には指示詞の使用回避が現れるとの指摘(佐々木 1997)があり、結束性の問題は指示詞の習得研究にかかわる重要な視点なので、今後の研究の進展に期待したい。

本稿は、日本語の指示詞を中心とした比較対照研究を概観してきた。筆者の能力上の制約によって、日本語と他言語の対照研究をめざしながらも本稿では日本での研究の動向の紹介に比重を置かざるをえなかったが、学習者言語の分析観点を提供した点は、意義を持つと考える。しかし、本稿で提示した仮説は、学習者言語の更なる分析などを通して確かめる必要があると思われる。とりわけ聞き手領域を持つ他の言語を取り入れた分析が必要であろうと思われる。また、指示詞の使い分けに関わる要因間の関係が複雑であることを指摘したが、各言語の特徴を述べるに留まった。より詳細な分析が必要だと思われる。これらの点は今後の課題としたい。

謝辞

本稿の完成にあたり、査読者から貴重なコメント

を頂いた。向山陽子さん、鈴木伸子さんには内容に関して助言を頂いた。また、尹喜貞さんには韓国語に関して助言を頂いた。ここに厚く感謝申し上げる。

注

1. 金水敏・田窪行則(編)『日本語指示詞研究文献一覧』。1901 年から今日までの指示詞に関わる論文が掲載されている。論文情報も随時更新されている。
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/dembib.html
2. 古田(1980)は、明治時代までの日本語指示詞研究を通時的にまとめた。本稿で取り扱う指示詞は現代日本語におけるものであるため、古田のこの論文はここでは取り上げないことにする。
3. 例えば、「だからもう本当にアレじゃない」の「アレ」にあたるようなもの。わかってくれると期待されているのに指示対象がわからない聞き手は「なんだったっけ」と考えさせようとする姿勢になる(菅沼 2000: 14)。
4. 袴田(1999)には、調査資料は 2 種類あるが、1 種類の対象者の人数及び母語等の情報が明示的に提示されていないため、ここではそのもう 1 種類のインドネシア語母語話者を対象とした調査のみ紹介する。
5. Levinson(1983)は、「照応」ではなく、談話のダイクシス(discourse deixis; text deixis)と呼んでいる。
6. なお、指示詞用法の分析にあたって、研究者によってダイクシスと照応という二つの用語の定義が異なっている場合もあるので注意が必要である。森塚(2003: 54)の表 1 に主要なものがまとめられているので参照されたい。
7. 吉田(1980)によると、指示詞(「指示代名詞」と「指示形容詞」の上位概念)と場所の指示詞は常に一致するわけではない。
8. 3 分型を細分すると、3F 型(話し手を中心とした類型のことで、例えばアラビア語)と 3H 型(「聞き手に近い」空間をもつ類型のことで、例えば日本語、韓国語)の 2 つのタイプに分けることができるという(吉田 1980)。
9. 田尻他(2004)によれば、インドネシア語の場合は、「日本語のコレ・ソレ・アレにあたる語は、ini と itu の二語である」が、場所を示す「ココ・ソコ・アソコ」にあたる語は sini; situ; sana の三語が対応」し、「二項対立をベースにして、場所を示す場合は三項対立」(田尻他 2004: 207)となる。
10. 談話管理理論の詳細は、金水・田窪(1990)を参照されたい。
11. D は direct; digested の頭文字、I は indirect; inferential の頭文字である。
12. Miura & Christensen(1991)で取り上げられた 3 言語の照応用法は、次のようになる。中国語には、「ta+NP」という形式がないので、取り上げられていない。

英	this	it	that	this +NP	the +NP	that +NP
日	コレ	ソレ	アレ	コノ +NP	ソノ +NP	アノ +NP
中	zhe	ta	na	zhe +NP	*(ta+NP)	na +NP

13. Miura & Christensen(1991)の要旨では、日本語に最も多く使用される照応のタイプは「'アレ' と 'アノ+NP'」と記載されているが、本文の内容によると、「'ソレ' と 'ソノ+NP'」というタイプが最も多く見られることが分かった。要旨に記載不備があると思われる。本稿はその本文の結果を紹介することにする。
14. なお、対立的な視点は、「指示対象に対する話し手の評価や感情に動機付けられて成立する場合も少なくない」と木村(1992: 190)では述べられている。
15. 正保(1981)は、現場指示の対立型に表われるソが緊張したソであり、融合型に表われるソが「弛緩したソ」と称している。融合型のソ系は、コで示すほど近くなく、アで示すのは遠すぎる、というときに用いられるという。
16. なお、今井(2003)の実験では、指示対象が 1 つの場合と 3 つ以上ある場合と分けて調査をした。指示対象が 1 つの場合、話し手からの相対的距離は、日本語では 3 分割となり、タイ語では 2 分割となるが、指示対象が 3 つ以上ある場合は、タイ語が日本語と同様に 3 分割となっている。そこでタイ語の 3 つ目の指示詞(NOON)を「強調のリモート(Emphatic Remote)」と今井は呼んでいる。
17. 金水(1999: 76)では、これを「直示優先の原則」と称している。同論文では、直示を「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである」(金水 1999: 68)と定義している。この定義によると、本稿でいうダイクシスに包含されると思われるので、ここでは「ダイクシス」という用語に代える。
18. 金水などの一連の研究は、金水(1988, 1999)では「朝鮮語」が使われているが、その他の研究では「韓国語」が用いられている。その一連の研究においては、両者は同じ言語として扱われているので、本稿では便宜上、「韓国語」に統一して用いることとする。
19. 金水などは、3 項指示体系の言語例として、韓国語のほかに、トルコ語も取り上げて分析している。日本語の指示詞の習得研究では、トルコ語を母語とする学習者を対象者とした研究は現在見当たらない。そのため、トルコ語についての紹介は別の機会に譲る。
20. 金水(1988: 125)では、中国語について、「ただし教室の先生と生徒位に距離が離れると、相手側の対象を zhe でマークすることは難しくなるが、その場合は指示詞の使用が回避される傾向にある」という記述がなされているが、木村(1992)で指摘されているように、中国語では対立的視点をとることもあり、その場合は、na を使うことになるが、その多くは感情や否定的評価を伴っている。
21. この部分は田窪(1987)を参考にしている。
22. 白井・Patschke(2000)で用いられた資料は、2 年間で収集した 1 歳から 8 歳までの英語と日本語の二言語併用児の発話資料である。

参照文献

浅井美恵子 (2004)「日本語の論説的文章における指示詞の使用－日本語母語話者と日本語学習者の「この」「その」－」『第 15 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』36-41.

安龍洙 (1996)「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について－非現場指示の場合－」『東北大学文学部日本語学科論集』6, 1-13.

安龍洙 (1998)「韓国人学習者の非現場指示の「コ・ソ・ア」の習得過程研究－語用論的な観点から－」『文化』62, 112-123.

安龍洙 (1999)「韓国人学習者と中国人学習者の現場指示コソアの習得に関する一考察－相対的現場指示の場合の対立型の場合－」『東北大学文学部言語科学論集』3, 1-12.

安龍洙 (2000)「韓国人学習者と中国人学習者の現場指示コソアに関する習得研究」『文化』64, 113-124.

安龍洙 (2001)「韓・中日本語学習者の指示詞の使用に関する一考察－コ系・ソ系・ア系のすべてが使用可能な場合－」『文化』65, 145-165.

安龍洙 (2002)「韓・中日本語学習者の非現場指示の使い分けに関する研究－複数使用可能な指示詞のソ系とア系を中心に－」『日本語教育論集』18, 1-16.

庵功雄 (1995)「テキスト的意味の付与について－文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に－」『日本語学報』14, 79-93.

庵功雄 (1997)「国語学・日本語学におけるテキスト研究」荻野綱男(編)『言語とコミュニケーションに関する研究概観』平成 8 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)(企画調査)研究成果報告書 48-70.

庵功雄 (1998)「テキスト言語学の理論的枠組みに関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』1, 31-50.

石井誠 (1998)「日中対照指示詞の研究」『国文学 解釈と鑑賞』63(1), 112-121.

伊豆原英子・嶽逸子 (1992)「中・上級学習者の話し言葉（独和）の分析と考察－情報伝達を通して－」『日本語教育』77, 103-115.

今井新悟 (2003)「指示詞領域の決定要因」『日本認知言語学会論文集』3, 204-215.

上垣康与 (1997)「日本語学習者の指示詞使用－文脈指示のコ・ソ・アの選択－」『九州大学留学センター紀要』8, 27-40.

上野田鶴子 (1984)「照応関係を示す「この／その＋名詞」とそれに対応する英語の表現」『国立国語研究所報告 79 研究報告書 5 「日本語と外国語との照応現象に関する対照研究」』214-224.

上村隆一 (1996)「コーパスによる日本語会話分析－指示詞の使用について－」『言語探求の領域 小泉保博士古稀記念論文集』93-104.

遠藤めぐみ (1988)「日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究」『東京大学教育学部紀要』28, 285-294.

王亜新 (2004)「文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違－日文中訳作品の実例分析－」『東洋大学紀要 言語と文化』4, 83-98.

王宏 (1994)「日中語対照研究と日本語研究」『新しい言語理論と日本語』（第 2 回国立国語研究所国際シンポジウム報告書）66-66.

奥田寛 (1995)「中国語の任意性指示詞“這”について(1)：語用論的アプローチ」『姫路獨協大学外国語学部紀要』8, 204-217.

生越直樹(編) (2002)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会

川鶴望 (1999)「指示詞に関する日英語の比較対照研究」『上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース(英語)研究論集』14, 51-65.

金原鎰 (2000)「日本語の指示語「コ・ソ・ア」－韓国語の指示語「이(i)・그(ku)・저(ce)」との対応関係を中心に－」『表現研究』72, 57-65.

金智英 (2004)「在日コリアン一世の指示詞の運用」『世界の日本語教育』14, 21-34.

木村英樹 (1986)「「その時計」と「この時計」」『中国語』319, 32-32.

木村英樹 (1992)「中国語指示詞の「遠近」対立について－「コソア」との対照を兼ねて－」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』181-211.

金水敏 (1988)「「話し手・聞き手」と「遠・近」」『日本語教育の現代的課題予稿集』(津田塾設立 40 周年記念日本語国際シンポジウム) 123-132.

金水敏 (1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4), 67-91.

金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002)「指示詞の歴史的・対照言語学的研究－日本語・朝鮮語・トルコ語－」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』217-247.

金水敏・田窪行則 (1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展 特集 メンタル・スペース』3, 85-115.

金水敏・田窪行則(編) (1992)『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房

工藤進 (2003)「冠詞をさかのぼる」『月刊言語 特集 冠詞の言語学』32(10), 74-80.

國廣哲彌 (1981)『日英語比較講座－第 2 巻 文法－』大修館

久野暲 (1973)「コ・ソ・ア」『日本文法研究』185-190.

黒田成幸 (1992)「(コ)・ソ・アについて」金水敏・田窪行則(編)『指示詞』ひつじ書房 91-104.(林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編) (1979)『林栄一教授還暦記念論文集 英語と日本語と』くろしお出版 41-59 から再録)

高革萍 (2002a)「指示詞の日中対照－中国人学習者による誤用を参考に－」『早稲田日本語研究』10, 123-134.

高革萍 (2002b)「指示詞把握実態調査とその誤用分析－中国人学習者を対象に－」『北條淳子教授古稀記念論集』83-95.

高麗雅 (1986)「指示詞「コ・ソ・ア」についての一考察－コノ・ソノ・アノを中心として－」『日本語教育』60, 221-227.

コンジット・サランヤー (2004)「日本語とタイ語の現場指示－話し手と聞き手が横に並んで対話する場合－」『筑波応用言語学研究』11, 73-84.

斉藤こずゑ・久慈洋子 (1985)「デイスコース知識-指示能力-」『「言語の標準化」　会話能力の発達段階』無藤隆 研究代表(編) 昭和 57, 58, 59 年度科学研究費補助金特定研究(1)会話能力研究グループ研究成果報告書　15-39.

酒井たか子 (1987)「コソアの用法の研究-根本原則のキャンセル条件－誤用研究中間報告－」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』2, 57-65.

阪田雪子 (1971)「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21, 125-138.

佐久間鼎 (1936, 増補版 1951)『現代日本語の表現と語法(改定版)』厚生閣

桜井明治 (1966)「日本語指示代名詞「SOKO」の中国語訳の研究－その 1－」『ことば』34, 38-49.

迫田久美子 (1993a)「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81, 67-80.

迫田久美子 (1993b)「コミュニケーションにおける「あれ」の用法と機能」『日本語教育』80, 195-196.

迫田久美子 (1996a)「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程－対話調査による縦断的研究に基づいて－」『日本語教育』89, 64-75.

迫田久美子 (1996b)「日本語の指示詞ソとアの使い分けに関わる聞き手配慮について」『細田和雅先生退官記念論文集　日本語の教育と研究』39-52.

迫田久美子 (1997a)「中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』7, 63-72.

迫田久美子 (1997b)「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』1, 57-70.

迫田久美子 (1998)『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社

佐々木泰子 (1997)「日本語における結束性の発達と習得－指示語と繰り返し－」『児童・生徒・学生及び日本語学習者の作文能力の発達過程に関する研究』平成 8 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書 31-41.

讃井唯允 (1988)「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『人文学報』198, 1-19.

讃井唯允 (1997)「指示詞“這／那”二つの用法」『中国語』445, 26-29.

白井純子・Patschke, C. (2000)「幼児の指示詞の発達－二言語併用児の言語習得からの検討－」『日本認知科学会第 17 回大会 JCSS2000』ポスター発表 2

申恵璟 (1985a)「第二言語としての日本語習得における「コ・ソ・ア」の問題」『言語の世界』2(2), 97-111.

申恵璟 (1985b)「韓国語の指示詞 I, ku, cho と日本語の指示詞コ、ソ、ア」*Sophia Linguistica: Working papers in linguistics*, 18, 102-112.

菅沼文子 (2000)「最近の指示語研究と日本語からの貢献－指示語使用における普遍性と個別性を求めて－」『日本女子大学紀要 文学部』49, 1-17.

正保勇 (1981)「「コソア」の体系」『日本語教育指導参考書 8　日本語の指示詞』51-122.

宋暁雨 (2002)「指示語に関する日中対照研究－観念指示と文脈指示について－」『麗澤大学大学院言語教育研究科年報』4, 17-33.

宋晩翼 (1991)「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究－「コ・ソ・ア」と「이・그・저」との用法について－」『日本語教育』75, 136-152.

宋晩翼 (1999)「韓国人学習者に対する非現場指示のソとアの指導」『奥田邦男先生退官記念論文集　日本語教育学の展開(第一部　日本語教育学)』42-55.

孫愛維 (2005)「指示詞の学習過程における JSL と JFL の相違性－台湾人日本語学習者を中心に－」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公刊)

高橋太郎・鈴木美都代 (1982)「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集　国立国語研究所報告集 71』3, 1-44.

田窪行則 (1987)「誤用分析 1」『日本語学』6(4), 104-107.

田窪行則 (1990a)「対話における知識管理について－対話モデルからみた日本語の特性－」『アジア諸言語と一般言語学』837-845.

田窪行則 (1990b)「対話における聞き手領域の役割について－三人称代名詞の使用規則からみた日中英各語の対話構造の比較－」『認知科学の発展　特集　メンタル・スペース』3, 67-84.

田窪行則・木村英樹 (1992)「中国語、日本語、英語、フランス語における三人称代名詞の対照研究」『日本語と中国語の対照研究論文集（上)』137-152.

田窪行則・金水敏 (1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3), 59-74.

田尻英三・アフマッド ダヒディ (2004)「インドネシア語の指示語」『国文学解釈と鑑賞　特集　<空間>の言語表現』69(7), 207-212.

田中望 (1981)「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語教育指導参考書 8　日本語の指示詞』1-50.

単娜 (2003a)「中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公刊)

単娜 (2003b)「中国人学習者による指示詞の使い分け－非現場指示のソ系とア系の場合－」『第 14 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』80-85.

単娜 (2004)「あるトライリンガルの言語使用についての調査－日本語指示詞の使用を中心に－」『三言語併用環境における日本語の発達に関する研究』長友和彦　研究代表(編) 平成 14～15 年度科学研究費補助金研究成果報告書　87-99.

千葉修司・村杉恵子 (1987)「指示詞についての日英語の比較」『津田塾大学紀要』19, 111-153.
陳露 (2004)「中国語の指示語から－日本語との対照をかねて－」『国文学解釈と鑑賞　特集＜空間＞の言語表現』69(7), 188-198.
堤良一 (1998)「文脈指示における「その／この」の言い換えについて－名詞が導入する変項に注目した一分析－」『日本語・日本文化研究』8, 43-55.
角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
東郷雄二 (2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7, 27-46.
中河和子 (2002)「高専生ベトナム語話者の指示詞習得に関する縦断研究」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公刊)
長友和彦 (1995)「第二言語としての日本語の習得研究」『概説日本語教育』三修社 160-179.
長友和彦 (2003)「第 2 言語習得・Bilingualism 研究から多言語習得・Multilingualism 研究へ：新たなパラダイムを考える」『第 14 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』40-43.
中みき子 (1989)「指示詞「(コ)・(ソ)・ア」と「這」が対応する時」『研究論叢』34, 425-432.
中みき子 (1990)「小説における日・中指示詞の機能の差異について」『研究論叢』35, 278-287.
西出和彦・高橋鷹志・渡辺秀俊 (1988)「指示代名詞の使い分けによる個人空間の領域分節」『日本建築学会大会学術講演梗概集』63, 547-548.
新村朋美 (1992)「指示詞の習得－日英語の指示詞の習得の対照研究－」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』4, 36-59.
新村朋美 (1998)「日英指示詞対照（その 2：「ア」系指示詞と that)」『講座日本語教育』33, 75-94.
新村朋美 (2005)「空間・対象・相手認識に関する日中英対照」『日本認知言語学会第 6 回大会 CONFERENCE HANDBOOK』258-261.
西原鈴子 (1990)「日英対照修辞法」『日本語教育』72, 25-41.
袴田麻里 (1999)「コ・ソ・アの自然習得－工場内作業に従事するインドネシア語話者の場合－」『南山日本語教育』6, 69-107.
服部四郎 (1968)「コレ・ソレ・アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』三省堂 71-80.
パドゥンパッタノードム・オンウマ (2004)「タイ語の指示詞－「NII」「NAN」「NOON」を巡って－」『国文学解釈と鑑賞　特集＜空間＞の言語表現』69(7), 199-206.
菱沼透 (1984)「「その」の機能と対応する中国語の表現」『国立国語研究所報告 79　研究報告書 5　「日本語と外国語との照応現象に関する対照研究」』224-235.
古田東朔 (1980)「コソアド研究の流れ（一)」)『人文科学科紀要』71, 119-156.
堀口和吉 (1978)「指示語『コソア』考」坂倉篤義(監修)『論集日本文学日本語　5 現代』137-158.
牧野美奈子 (1993)「中国語の指示詞とテクスト」『中国語学』240, 99-108.
三枝令子 (1998)「文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け」『一橋大学留学生センター紀要』1, 53-66.
三上章 (1955)『現代語法新説』刀江書院（1972 年くろしお出版より復刊)
三上章 (1970)「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版 145-154.
見澤めぐみ (1986)「幼児におけるあいまいな指示詞の解釈」『東京大学教育学部紀要』26, 245-250.
望月八十吉 (1968)「中国語の指示詞」『中国語学』177, 1-6.
森田良行 (1982)「指示詞の扱い方」『講座日本語教育』18, 22-37.
森塚千絵 (2001)「日本語初級学習者の指示詞の習得過程－ダイクシスと照応を統合した習得の枠組みから－」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公刊)
森塚千絵 (2002)「日本語指示詞の習得に関する事例研究－自然習得から教室学習へ移行したロシア語母語話者を対象に－」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』長友和彦　研究代表(編) 平成 12～13 年度科学研究費補助金萌芽的研究 研究成果報告書 115-129.
森塚千絵 (2003)「日本語の指示詞コソアとその習得研究の概観」『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号 (『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』) 51-75.
吉田集而 (1980)「指示詞に見られる空間分割類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5, 822-950.
梁慧 (1986)「「コ・ソ・ア」と「這・那」：日本語・中国語の比較対照研究」『都立大方言学会会報』116, 9-18.
ワーサナー・ウィーラパースック (1995)「日・タイ指示詞の対照研究－「コ・ソ・ア」の誤用分析を中心に－」『言語文化と日本語教育』9(水谷信子先生退官記念号), 315-325.
渡邊亞子 (1996)『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
王宏 (1985)日汉语指示词的对应关系《日语学习与研究》32, 15-21. (王宏 1985「日中指示詞の対応関係」『日語学習与研究』32, 15-21.)
许余龙 (1989)英汉远近称指示词的对译问题《外国语(上海外国语学院学报)》62, 33-40. (許余龍 1989「英中遠近称指示詞の対訳問題」『外国語(上海外国語学院学報)』62, 33-40.)
余维 (1997)「時間指示的語用対比分析：漢外対比語用学的嘗試」『研究論集』65, 149-163. (余維 1997「時間指示における語用的対比分析－中国語と他言語における語用論的比較に関する一考察－」『研究論集』65 , 149-163.)
Diessel, H. (1999) *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*, Philadelphia: John Benjamins.
Dixon, R. M. W. (2003) Demonstratives: A cross-linguistic

typology, *Studies in Language*, 27(1), 61-112.

Ellis, R. (1985) *Understanding second language acquisition*, NY: Oxford University Press. (牧野高吉(訳) 1995『第二2 言語習得の基礎』ニューカレントインターナショナル)

Higashiyama, A. & Ono, H. (1988) "Koko," "soko" "asoko" ("here" and "there") as verbal dividers of space Japanese, *Psychological Research*, 30, 18-24.

Hoji, H., Kinsui, S., Takubo, Y. & Ueyama, A. (2003) The demonstratives in modern Japanese, In Y. A. Li & A. Simpson (Eds.), *Functional structure(s): Form and interpretation*, London: Routledge Curzon, 97-128.

Huang, S. (1999) The emergence of a grammatical category definite article in spoken Chinese, *Journal of Pragmatics*, 31, 77-94.

Kemmerer, D. (1999) "Near" and "far" in language and perception, *Cognition*, 73, 35-63.

Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, NY: Cambridge University Press.

Lyons, J. (1977) *Semantics* 2, Cambridge: Cambridge University Press

Miura, I. & Christensen, K. A. (1991) The Use of Anaphoras in English, Japanese and Chinese, 『京都教育大學紀要 A 人文・社会』79, 127-134.

Niimura, T. & Hayashi, B. (1994) English and Japanese demonstratives: A contrastive analysis of second language accquisitionial: *Issues in Applied Linguistics*, 5, 327-351.

Odlin, T. (1989) *Language transfer: Cross-linguistic influence in language learning*, Cambridge: Cambridge University Press.

Strauss, S. (2002) This, that, and it in spoken American English: A demonstrative system of gradient focus, *Language Sciences*, 24, 131-152.

Takubo, Y. & Kinsui, S. (1997) Discourse management in terms of mental spaces, *Journal of Pragmatics*, 28, 741-758.

Tao, H. (1999) The grammar of demonstratives in Mandarin conversational discourse: A case study, *Journal of Chinese Linguistics*, 27(1), 69-103.

Yoshimoto, K. (1986) On demonstratives KO/SO/A in Japanese, 『言語研究』90, 48-72.

Zhang, M. (1991) *A contrastive study of demonstratives in English and Chinese*, Ph. D. dissertation, Ball State University.

たん　な／お茶の水女子大学大学院在学　応用日本言語論講座

shanna_sn@yahoo.co.jp

An overview of studies in Japanese demonstratives
—Focusing on contrastive analysis—

SHAN Na

Abstract

According to dated researches, it is known that the appropriate use of Japanese demonstratives is difficult for learners of the Japanese language. This paper will review researches in Japanese demonstratives focusing mainly on contrastive analysis. Studies of demonstratives in Japanese with English, Japanese with Chinese, Japanese with Korean as well as Japanese with Thai will be analyzed. The aim of this paper is to point out the positioning and features of Japanese demonstratives according to the comparative analysis. The result is applied to the acquisition research on the demonstrative. For this purpose, first, I will present the problem in acquisition study of Japanese demonstratives, then propose the basic definitions of demonstratives related to this paper. Secondly, I will review the contrastive studies to the instruction system based on linguistic theories (Japanese linguistics) accordingly. Finally, I will illustrate the universality and individuality as seen in factors of using proper Japanese demonstratives and describe how the findings obtained from the contrastive studies are related to the acquisition research.

【Keywords】 deixis, anaphora, factors of using proper demonstratives, universality, individuality

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)